
静かなる老人

めけめけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かなる老人

【NZコード】

N2404Y

【作者名】

めけめけ

【あらすじ】

東北地方太平洋沖地震による東日本大震災。未曾有の被害をもたらしたこの巨大地震、そして津波は、人的物的被害、それに伴う経済社会に対する影響は計り知れないものがある。今なおその爪あとは深く、多くの問題を抱えながら人々は前に進むことをやめるわけにはいかない。

2011年3月11日14時46分18秒から始まった非日常は、今も日常として続いている。私はその非日常の始まった日の出来事

を一つの物語としてここに書き綴る。

あの日世田谷から渋谷、そして品川までの道のりで何を見、何を聞き、何を感じ、何を考えたのかを。

仕事先で被災した主人公は、交通機関の麻痺する中、どうにかして家に帰ろうとする。そんな中、一人の老人と出会い、行動を共にする。最初は多少~~懐~~陶しく感じていた老人への気持ちは、非日常の混乱の中、少しづつ変化を始める。

はたして現実なのか夢なのか。主人公は老人と不思議な短く長い旅をすることとなる。

東北地方太平洋沖地震（前書き）

いつこのものを「文学」と呼ぶのか 或いは「ホラー」なのか 私にはよくわからないが、文学としてきつちりとしたものでもなければ、ホラーと呼べるほど怖いことはない。しかし、この世のものではない何かが出るといえれば出るし、夢や幻程度であれば、それはホラーとはいわない。【このお話は怖い夢をみました】というものと、なんらかわらないかもしれない。強いて言えば、そういうジャンルの物語です。

東北地方太平洋沖地震

平成23年3月11日14時46分18秒。日本が揺れた。後に東北地方太平洋沖地震と呼ばれる大地震は、地震の規模、そしてそれに伴う津波の大きさは想像をはるかに越えた『想定外』のものであつた。この震災による被害の規模は一ヶ月を過ぎた4月中旬でも死者・行方不明者の正確な数字は把握できていないほど甚大なものであり、また、更に深刻な問題として福島の原子力発電所の事故による今後の影響は、経済、地域社会、人体に対する放射能の影響などを考えると震災そのものはその後も続く余震のごとく、まったく終わりが見えてこない。

普段は事務所での仕事が多い私は、震災が起きたその日に限つて外出先しており、不慣れな土地で地震に見舞われた。そして私は都内の交通網が完全に麻痺する中、いわゆる帰宅難民となり、現場から8時間かけてようやくの思いで、自宅ではなく、両親の住む実家に帰ることができた。

実家のある品川にたどりつくまでの間、実家にも江戸川区に住む家族にも全く連絡が取れなかつたのだが、twitterを使って何人かの知人と連絡を取ることができた。その中に幸い、我が家のある所に住んでいる前の会社の同僚があり、連絡が取れない家族の様子を見に行つてもらうことができた。普段であれば一日連絡が取れないくらいで、右往左往する必要はないのだが、しかし、あれだけの揺れ、しかも毎週金曜日は、小学4年生の娘が塾へ行く日なのが、ちょうどその時間とぶつかっていたために、家族の安否がどうしても気になつていた。

私は地震が来たそのとき、東京世田谷区の豪徳寺駅から歩いて数分のクライアントのところで、通信回線工事の立会いに借り出されていた。震災の規模がどんなものなのか。尋常ではないことは writer の書き込みで知りはしたもの、まったく実感がわかつた。テレビやラジオを見たり聴いたりした人の断片的な話を聞いても、それがどこまで深刻なことなのか、全くつかめないでいた。しかし作業が終わり、帰り際に日に飛び込んできたクライアントのテレビの映像は、想像をはるかに越えるものだつた。が、それを現実として受け入れられるようになるのは、そこからバスに乗り、数時間かけてよやく渋谷駅に着いたときだつた。

渋谷駅は帰宅しようとする人々で溢れかえっていた。良くこの状態でなにも暴動とか起きないものだと、感心するほど、みんなが冷静であつたのには驚かされた。たぶん日本以外ではこうはならないだろう。ホテルなどの人を収容できる施設が、帰宅難民の一時受け入れを始めたニュースが入つてきたのは、豪徳寺から一駅歩いた経堂駅から渋谷に向かうバスの中だつたが、それがどういう意味を持つことなのかはそのときにはわからなかつた。すっかり道路は渋滞し、はたして本当に渋谷駅につく事ができるのかという不安というよりは諦めムードの中、それでも渋谷駅についたときには、ここまで座つてこれた幸運に感謝し、3時間近くも立ちっぱなしの年寄りには、本当に申し訳ない気持ちになつた。だが、私が席を譲ることはできなかつた。席を譲るためのスペースが、バスにはなかつたからである。

実家にたどり着くまでの8時間あまりの道のり。私の半径5メートル以内でおきた非日常的な出来事の数々。私はその中で、ただひたすらに妄想にふけるしかなかつた。しかし、そうした妄想のほうがはるかに現実的で、日に日に明かされる事実は、どちらが現実でどちらが妄想なのか、はたまた夢なのかが、わからないほどに『こ

の世界』は変わってしまった。

私は物書きだ。物書きは物書きの視点で見たこと、聴いたこと、そして考え、思い、感じたことを書かなければならぬ。震災の日、そして震災以後の世界。その中で前に進むための糧となるよなことを書かなければならない。或いは、間違ったこと、不条理な事があれば、それらに対して警鐘を鳴らさなければならない。そのどちらの条件も満たすようなことを書ける時期では、今はまだないと思いながらも、それでも私は書かずにはいられない。

今書きたいと思ったことは、今書かなければ一度とかけない。

その思いが私を突き動かし、私はあの日の出来事を一つの物語として書くことを決意した。この物語は、『震災』という出来事をテーマにしているが、新聞やテレビに報道されているような巨大なエネルギーによる破壊、自然の驚異の前に命を落とした人々、残された人の悲しみといったスケールのものではない。もつとより内面的であり、間接的であり、しかし、それがゆえに人の想像や妄想の範囲内の視野で見える世界。そういう物語を書こうと思う。

それで果たしていいのだろうか？　という疑問にさえなまれながらも、しかし、私は書かずにはいられない。この物語は決して被災地の方を勇気付けるものでもなければ、心を暖めるものでも、心を躍らせ、辛い気持ちをやわらげるものにはなりえない。私は、こういう形でしか、今は書けないのだから、書ける物を書く。ただ、それだけである。それが正しいかどうかは、きっとこの物語を書き終えたときにしか、わり得ないのだから。

震災に遭われ、今なお避難生活を強いられている多くの皆様に心から御見舞い申し上げます。そして震災で命を落とされた方、心よりご冥福をお祈りします。

平成23年4月15日
めけめけ

第1話 豪徳寺1~4時過ぎ

> . 3 4 2 1 3 — 1 6 4 4 <

「じゃあ君、そういうことで、宜しく頼むよ。それにしても遅いなあ、工事業者」

院長はイライラしていた。このタイプは人を待たすことはあっても待たされることには嫌いだというタイプだろう。噂には聞いていたが、会つてまだ1時間ほどしかたっていないが、どんな人物なのか大体つかめた。

「1時から3時とか、そういう風にしか、指定できませんからね。遅れることはあっても早くなることはなかなか……特に3月4月は引越しシーズンですからね。工事、押しているんでしちゃう」

気休めでしかないが、会話を工事業者が来るのが遅いという話にもつていつたほうが、面倒がなくていい。こういう不快な待ちの時間を共有すると、こちらの不備を一つ一つ見つけては、ああだ、こうだと注文をくけてくる事だってありえる。前任者はすっかり院長を怒らせたらしく、その尻拭いにきた自分としては、なるべくことを穩便に済ませたい。前任者の悪口、工事業者の悪口、ここはそれで乗り切るのが吉だらう。

「だつて、オレ、いつたんだよ。診療時間とかあるから、この時間じゃなくちゃ困るって」

そんなことをいちいち電話会社が対応していたら、それこそ予定通りになんか行くはずがない。それにしても面倒なことになつた。こちらの作業は30分もかかるないといつのに、いや、正直10分もあればできる作業なのだ。1時からの作業だと指定を受けてきたものの、肝心の工事業者が来ないので、院長の愚痴を延々と聞き

ながら待つしかない。できれば、早く帰りたいものだ。

「じゃあ、申し訳ありませんが、わたしは次がありますので、あと
は川島が引き継ぎますので、宜しくお願ひします」

前任者が諸般の事情で会社をやめ、その引継ぎはあまりスマーズ
にはできていなかつた。付き添いの戸田部長は次の商談のアポを2
時半に控えていた。もう2時にならうとしている。小田急線豪徳寺
駅から東西線茅場町までは40分ほどかかる。遅刻だ。

「じゃあ、あとよろしくね」

『凡庸』というのが戸田部長の周りからの評価だ。良くも悪くも
普通。私はそういうところがあまり好きではなかつた。営業をして
いれば多少の無茶は必要だ。その意味では前任者の中島といつ男は
手段を選ばなかつた。トラブルも多かつたが、その分営業はとつて
きていた。火消し役となる上司や同僚がいるからこそその無茶なのだ
ろうが、私にとっては、そのくらい振り切っていたほうが、計算が
しやすい。欲のある人間は、付き合いやすい。

戸田部長が医院を後にした後、午後の診察を受けるために、4つ
5人の患者が入り口のところに立つていた。みんな年寄りばかりで
ある。2時から午後の診療受付が開始する。完全にスケジュールオ
ーバーだ。「どうしよう。患者さん来ちゃつたよ」「大丈夫ですよ。
今お使いのシステムはオフラインでも機能しますし、回線が途中で
切り替わっても影響ありませんから、業務には支障はありません」

本来はオンラインで使っているべきシステムが、まだ完全に稼動
していないのは、前任者の積み残した宿題のせいなのだ。今日よう
やくその光回線が院内に引き込まれることになつた。通信機器の接
続設定をちょっと書き換えるだけの作業ではあるが、そういうた機
器は直接医院の人間には触れないようにしてもらつていて。セキュ

リティといつ言葉は、いつときに便利でもあり、また不便でもある。

「どうぞ、受付を始めていただいて結構ですよ。私は外で工事業者が来るのを待ちますから」体のいい言い訳で、私は院長の愚痴から逃げることに成功した。スタッフが休憩から戻り、受付が始まつた。14時20分、『そのとき』が訪れる前兆はどこにも見当たらなかつた。何気ない日常のなんでもないような時間が過ぎていくだけだつた。

第2話 14時46分 最初の揺れ

「川島さん、今電話があつて、前の現場今終わつたつてよ。10分くらいで着くつて、回線業者からの電話！」

「はーい、わかりました。じゃ、もう少しだすねー。ここで待つてまーす」

「すまないねえ。じゃあ、業者が着たら、あとはよろしくー」「終わりましたら、報告しまーす」

携帯を見る。2時30分……予定通りならとっくに事務所に戻っている時間だ。

「まったく、回線の工事なんて、3月とか引越しシーズンにするなよなあ。まあ、そつは言つても、こればかりは仕方がないか「4月からオンラインでスタートするためには、ここ数日でインフラは整備しておかないと、土壇場でばたつくのはできるだけ避けたい。

「俺は、他の奴とはちがう」

私は自分が担当する現場はできるだけトラブルのなにように收める主義だ。成績としては戸田部長のそれと売上の変わらないし、前任者には及ばない。だが、一度契約した商品をすぐさま解約されるようなことは一度もなかつた。それが唯一私のプライドだ。医院では2時に受付を開始し、2時半から診察が始まつた。患者はほとんどが年寄りだ。世田谷の閑静な住宅街。どの家も自分より金持ちに違いないと思うとどうにもやる気がそがれる。心中でそんな悪態をついた後、携帯のメールをチェックしながら回線業者が到着するのを待つていた。そして時計は14時46分をまわつた。

「うん、揺れてるか?」

不意に眩暈のような感覚に襲われる。立ちくらみなどではない。
院内が騒がしくなった。

「こいつは……」

すぐに地震だと気が付いた。

「これは……ちょっと……大きいぞ」

私はすぐさま院内に飛び込み、様子を伺つた。地面の直接的な揺れと、建物の揺れは違う。椅子や机、パソコンのモニターに花瓶、絵画。ありとあらゆるもののがそれぞれは規則的に、しかし全体としてはバラバラに揺れている。

「やばそうなのは……」

それが値打ち者であるかどうかはともかく、壁から落ちたら危険だと判断した。色鮮やかな花が描かれている大きな絵画は、壁の上を這うように踊っていた。私は壁にかかつた大きな絵画を手で押さえた。

「扉開けて！外には出ないで！何かに捕まつて！姿勢を低く！」

院長が冷静に大きな声で患者やスタッフに声をかける。あまりのことのみんな声が出ていなかつたが、院長の声にとっさに数人のスタッフが反応し、ひとりはドアを開け、一人は花瓶を抑え、院長は待合室の患者に声をかける。

「大丈夫、大丈夫、もう少しすれば揺れは止まるから！」

しかし、院長のその言葉はむなしく裏切られた。揺れは恐ろしいほど長く続く。田の前でうずくまる70歳くらいの小柄なおばあさんには声をかける。

「大丈夫ですよ。ほら、僕の手を握つてくれださい」

左手で絵画を押さえ、右手をおばあさんに差し出す。おばあさんは両手ですがるように私の手を弱弱しく握つた。私は少し強く握り返した。

「もう、收まりますよ。大丈夫」

「長いなあ、これはそうとう大きいぞ。震源地どこだ」

みんな不安げに天井を見上げる。そこに何があるわけでもないし、この3階建ての建物が普通の家とはちがって、相當に丈夫にできることに感謝をしていた。

「戸田部長、電車の中で足止めだな。これは……」

いろんな事が思い浮かぶ。この規模の地震であればおそらく交通機関は麻痺、通信手段も断たれる可能性が高い。そして何より、この時間、娘が 私の娘は学校が終わって塾へ行く時間だ。はたして、無事でいるだろうか……いや、無事に決まっているじゃないか！

「大丈夫、もう大丈夫です。ちょっと、テレビ、テレビつけて」

院長は患者に一通り声をかけると奥の部屋に入つていった。私室だ。みんないつせいに携帯を手に様々な手段で事態を把握しようとすると、が、案の定、携帯電話は通じない。受付のインターネットに接続できるPCから情報を得る。どうやらとんでもない規模だ。震度4？そんなはずはない。これは5はあつたはずだ。

「すいません。遅れました。車、ここに止めて大丈夫ですか？」

なんとも妙なタイミングで回線工事業者が現れた。この人たちだけて、下手をすれば今の地震の最中、電信柱に登つて作業をしていたかもしれないのだ。彼らはラッキーなのかもしれない。院長もこの地震で彼らに対し怒ることは忘れるだろう。一方で予定通りなら、とっくに作業が終わつて事務所に帰つていたかもしれない私のなんと不運なことか！ 事務所から自宅までは徒歩で15分ほどのところだ。すぐに家に飛んで行けたはずである。こういう場合、たしか学校には親が迎えに行かなければならなかつたのではないか？

断片的な情報が錯綜する中、私はまだ、ことの深刻さに気付いてはいなかつた。自分の運の悪さを呪い、それでも地下鉄に閉じ込められている戸田部長よりはましだと、その程度にしか思つていなかつたのだ。

第3話 回線工事

「「ひっす」」いぞ。東北だ、東北。震度6強らしいぞ」「津波警報が出たけど、もう被害が出ているみたいだ」

「こわいわあ、でも良かった、ここに来ていて、わたし、ひとりじゃともとも……」

「そうよねえー、一人で居たら、どうしたらいいか、わからないわねー」

「でも、これじゃ家の中が大変なことになっているかも知れないわ」「困ったわあー。携帯繋がらない」

こんなとき、人はまず、自分が無事であることを喜び、更に深刻な事態になる可能性があつたことに比べて、よかつたと思う。そして、自分よりも大変な目にあつてている人のことを聞けば聞くほどその理由なき安心感は更に高まる。今にして思えばとんでもないことが、人が事態の深刻さ、それも自らの痛みを伴わない深刻さを自分での痛みとして変換して考えられるようになるには時間がかかる。それは想像力という特殊な能力が發揮されて始めてなしえることなのだ。

「はじこかけるから、しつかり抑えておけよー」「はいー」

どんなときでも、どんなところでもやるべき」とはある。遅れてきた業者は、このよいうな状況だからこそ、ここで仕事を早く終わらせる必要がある。しかし、やはり滑稽に見えてしまうのはいかんともしがたい。回線工事は、もつと簡単なものかと思つていたが、どうやら近くの電信柱に登り、そこから物理的に線を引かなければならぬいらしー。こんなときに大変だ。余震の心配だつてあるだろう。

「いやね。車の中でもわかつたんですよ。もつとも運転できるような状態じゃなかつたですよ」

工事業者は2人組み。明らかにひとりがベテランで棟梁の風情があり、もう一人はなんともいやらしい不貞の弟子といつた感じをうけた。こういうときには、こうじうめぐり合わせなのか……普通じやない日には尋常じやない事が続くものなのかもしれない。

棟梁がてきぱきと仕事をこなしていく。不貞の弟子はそれを補佐する。工事中の交通整理やはじごの固定、状況に応じて棟梁が必要な道具をワゴン車から取り出して渡す。そして後片付ける。二人の関係は傍目からも仲が言いようには見えないし、棟梁と弟子という一方的な服従を強いるものでも約束するものでもない。強いて言えば店長とベテランアルバイトみたいな関係のようだ。

「ほり、わかります。あれ、点灯してるでしょ。あれね、防犯システム作動しちゃってるの」

不貞な弟子はニヤニヤと笑いながらある人家を指差した。世田谷の一軒家2階建てのしつかりとしたその家の玄関近くに黄色いライトが点滅している。想像するに家の中のものが倒れたり揺れたりしたのをセンサーが感知したのだろう。高価な花瓶やちょっとした著名な画家が書いた絵画とかが床に落ちているのかもしれない。しかし、それを少しもかわいそうだと、気の毒だと思えないのは、私もこの男も同じようだ。

「ほりほり、こっちは瓦がすごいことになつててるよ、あー、あー、ありや大変だ」

言葉とは裏腹に不貞な弟子はその家のことを本氣で心配しているようには見えない。それは悪意とも違う、強いて言つならば、『いやらしさ』であろうか？ この男は回線工事をしながらいろんな住

宅を覗き見してきたのではなかろうか？ それが楽しくてこの仕事をしているのではなかろうか？ たしかに電柱の上から見える景色は、地上の景色と違つてはるかに赤裸々に違いない。そんなものを見せ付けられては、人はこうこうふうに『いやらしく』笑うようになるのだろうか？

「おーい、ワイヤーとつてくれ」

棟梁は少しばかりイラついているようだ。不貞な弟子との談笑は、棟梁の機嫌を損なうのかもしれない。ここは自粛したほうが懸命だ。私は繋がらないとわかつてている携帯を何度かかけてみる。その行為によつてこの不毛な会話が終わることだけは期待できそうだ。

「携帯はダメでしょう！ この道をいって右に曲がったところの酒屋の前に公衆電話があつたから、公衆電話なら通じるかも知れませんよ」

「なるほどですね。じゃ、ちょっと電話かけに行つてきます」

工事はまだまだかかりそうだ。自分の愛想笑いがいやらしくなる前に、あの男から離れたいと思つた私は、どうせ無駄だと思いながらも不貞な弟子の提案を受けることにした。

第4話 不通

どうやら大変なことになつてゐるらしい。そういう思いと、とりあえず、なにかしていないと落ち着かない、そして、意味のない待ち時間を、あの場所で過ごすのが嫌で、公衆電話に電話をかけに行つた。小さな交差点の角、右に酒屋が見える。その隣にタバコ屋のかパン屋なのか、よくわからない。もしかしたら、どちらでもないかもしない。信号機はない。サラリーマンらしき一人組みが携帯を眺めながらなにやら深刻な顔をしている。公衆電話は誰も使っていなかつた。とりあえず会社にかけてみるが通じない。

「この時間、誰もいないよな」

そう思いながらも家に電話をかけてみる。繋がつた。だが当たり前に留守番電話に切り替わる。この時間家には誰もいない。妻は、パートに出ているし、娘は学校から塾、息子は共働きの夫婦の子供を預つてくれる児童スクールに行つていて、いずれも5時を過ぎないと帰つてこない。しかもこの規模の地震なら、児童は学校で待機。親が迎えに行かないといけないだろう。

「まず、無理だな。きっと電車もみんな止まつてる」

私は家族と連絡を取るのを諦めた。その決断をした頃には、後ろに3人が公衆電話があくのを待つっていた。一人は主婦、一人はさつきのサラリーマンのうちの一人だ。多分、部下のほう。

「あ、終わりました。どうぞ」

事務所に関してはほとんど心配は要らないだろう。液状化とか、そういうことはあるかもしれないが、怪我人が出るようなことはないだろう。

「じりやあ、帰れないな。まいつたなあ、世田谷つてどこなのさ」

今居る場所から、まっすぐどちらに向かえば家に近づけるのか、まつたく検討もつかなかつたし、何のアイデアもなかつた。

「まあは、」この厄介」とを片付けて、それからだな

医院の前に戻ると作業は順調に進んでいた。不貞な弟子はにやつ
きながら私に尋ねた。

「どうですか？つながりました？」

「事務所はだめですね。呼び出しあはしてゐんですけど、誰も出ない。
まあ、何もないとは思います。いろいろと混乱しているんでしょ？」

「

私が勤めている会社は、東京でも浦安に近い場所に事務所がある。
医療系のシステムの販売といつても、ほとんどの人間が営業で、昼
間は事務員が一人、技術者が一人である。およそ電話は鳴りっぱな
しだろう。私のように外回りをしている営業からの電話や客からの
電話が、ひっきりなしに鳴りつづけているだろう。ビジネスフォン
の4回線のランプがずっと点灯している様子を想像し、少し気の毒
になつた。

「そちらはどうです？ 会社から連絡とかありました？」

不貞な弟子は、ちらりいやらしい顔でニヤニヤしながら答える。

「所詮会社なんてね、わたしらの安全なんて、これっぽつとも考え
ちゃいけませんよ。電話の一本もかかりちゃ来ません」

「なるほどね。どにも同じですか」

どうにも調子が狂う。私は本来、それほどの不平屋ではないのだが、この男と話していると、世の中全てが敵に思えてくる。不満はあるかもしれないが、不平とは思っていない。みんな平等に、蔑め
られている。少なくとも私の周りでは……

「もつとも、こんな調子じや、連絡を取りうつても、取れないでしょ

がね。次の現場まで行けるかどうか」

確かにそうである。このあたりは踏み切りを多いようだ。場所によつては相当な回り道をしないと線路の向こう側にいけなかつたりするのだろうが、そもそも道路がまともに機能しないだろう。この規模の地震があつた場合、線路の点検など含めたら復旧まで相当の時間をするに違いない。まあ、それもいい。今は、この場所、この現場から一刻も早く離れたい。

「よーし、終わつたぞー。はじか片付ける。中で通信確認するから準備しろ」

棟梁の言葉を聞き流しながら、すでに不貞な弟子は次の作業の準備にかかっていた。これでようやく開放される。時計は午後4時になろうとしていた。

第5話 いつもの「JET

「はい、では、こちらの作業は終わりましたので、あとはお宅のほうで機器の設定をお願いします」

棟梁は礼儀正しく、しかし義務的に私に作業の引継ぎを依頼した。どうやら、あまり好かれてはいないようだ。それまで利用していた通信回線は、まだ生きている。新しく引いた安価な回線は、もつとも家庭で使われているものだ。わたしの作業はその新しい回線にあって、古い環境のバックアップと新しい回線用の設定……とはいってもひとつの設定ファイルの「コピー」と、たった2行、IDとパスワードを書き換えるだけの作業である。ちょっと知識のある人間であれば、5分もかかるない。その5分の作業のために、片道一時間、業者が来るまでの2時間、業者の作業が終わるまでの1時間、計4時間を使やしたのである。

「はい、こちらの設定も終わりましたので、現場のネットワークの確認をお願いします。とりあえず、WEBがみれて、メールが出来ればOKですから」

確認をするのに5分。これでようやくこの場所から離れられる。

「あ、申し訳ないけど、いつも見てくれるかな？」

帰れると思った矢先に、院長の部屋においてあるヤコになにか不具合があると頼まれる。

「あ、いいですよ。どんな感じですか？」

「これは仕事じゃない。」

「だが、こうこうとのひとつひとつが、信頼に繋がるのだ」と専務はよく口にする。それはいい。だがその一方で、『タイム・イズ・マネー 時は金なりだ』と言つては、業績が上がらないのは業務効率が上がらないのが原因。つまり『のろまのお前らが悪い』という顔で言われるのは無性に腹が立つ。もともと、この件では、戸田部

長を始め、ほとんどの従業員が同じ考え方のようだ。そう、みんな平等に蔑まれ、何かを疎ましいと思つてゐる。

「あ、なるほどですね。セキュリティソフトが複数ありますので、古いほうは削除なさったほうがよろしいかと思います」

ソフトが無料だから、新しいのが出たからといって、何でもほいほいインストールするのは、院長と専務は同じ人種だな。私なら絶対にそんなことは……そう思つてはみても、それはそれで仕方がないことだと最近は思えるようになつた。そうやって世の中は回つているのだ。

「終わりました。これで変なメッセージは出ないと想いますよ」

「おー、そうか、そうか、じゃあ2階のPCも同じなんだね。ついでにそれもお願ひできるかな」

「2階ですか？」

「あー、2階のリビングにPCがあるから、ちょっとと待つてて、いま内線で妻に言つておくから、そのドアを開けてすぐの階段ね」

「はい、わかりました」

まつたく、いつもこゝだ。

言われたとおり2階に上がる立派な「ゴールデンリトリバー」決して賢そにはみえないし、だいいち私は猫派だが、間抜けな顔で私を出迎える。そして跡に続いて、院長とはとても年齢がつりあわない院長夫人が現れた。

まつたく、いつもこゝだ。

「すいません、なんか余計な事まで頼んじゃって、ご迷惑おかけします」

院長の『いかつさ』に院長夫人の『物腰の柔らかさ』と『しなや

かさ』は……

まったく、本当にいつもこうだ。

「いえいえ、おかまいなく」

そう言いながらも、私の目は部屋の隅々を物色しながら、ふだんどのような生活をしているのかを観察する。いつの頃か、そういうことが、実はとても役に立つことだと思うようになつた。院長の人となりは容易に想像できた。この部屋は完全に奥さんの管理下にある。すべて家のことは奥さんに任せているのだろう。部屋の家族の写真……息子が一人いるみたいだが、大学生くらいか。この奥さんは見た目よりもかなり歳がいでいるのか、或いは再婚か。

「これなんですけど、わかります？わたしはぜんぜん機械のことはわからなくて……いつも息子に怒られるんです」

一台のノートパソコン。壁紙に愛犬の画像。

まったく、いつもこうだ。

「あ、大丈夫です。すぐに終わりますよ」

作業は簡単だ。まったく同じ問題だった。ものの数分で作業は終わる。それよりも問題はテレビだった。私の考えは少し甘かったようだ。思わず作業をする手がとまる。

「こ、これって、かなりやばいことになつてますね」

「そうなのよ。もう怖くて怖くて、やっぱり原子力発電所つて危ないのかしらね」

まったく、いつもこうだ。

第6話 脱出

『本日、14時46分ごろ、太平洋沖を震源とする。強い地震が観測されました。地震直後に発生した津波により、太平洋沿岸部の地域に大きな被害が出ている模様です。また、福島の第一原発においては……』

46型くらいであるうか、私からはちょうど後ろになる。ノートPCはパソコンラックに壁向きに設置してあるので、画面を見るためには思いつきり振り向かないといけない。すぐに作業を終わらせ、終わりましたと報告する体裁で後ろを振り向くと、テレビの中では信じられない光景が映し出されていた。

「千葉のほうじゃ火災が起きてるみたいよ。有毒ガスの心配があるかもしだれないって」

院長夫人は、線が細く、そばに間抜けな顔をした犬がいなければ、きっと一人ではこの部屋に居られないのだろう。一生懸命に毛並みのいい犬の大きな背中を撫でながら、テレビを食い入るように見ていたい。お茶を出すのも忘れて。でもそんなことはどうでもいい。こういう言い方はおかしいかもしだれないが、私ですら、テレビの画面に映し出されている事態を、にわかに信じがたいと思っているのだ。人間はある想像力を超えた事態に直面すると、感覚が麻痺するらしい。これから起きるだろう、津波による被害の拡大、火災、流通、経済の混乱、物資不足、通信途絶、身内は、友人、知人の実家は？ そんなことをいつぺんに考えたらパニックになるにちがいない。処理が追いつかない場合は人もコンピュータも同じだ。フリー^ズするしかない。

「きつと家の水槽、えらいことになつてますね。物もいろいろ散ら

かつての

「どうやらからこられてんですか？」

「あ、はい、葛西、江戸川区です、浦安の隣です」

「あら、じゃあ、千葉に近いのね」

「はい、まいりましたね、これは……どうしたら帰れますかね」

「そうね、電車は全部止まっているみたいだし、バスなら渋谷へ行くバスが隣の経堂駅から出てたと思うけど、動いているかしらね」

「あ、でも、渋谷までいければ、何とかなるかもしません。ありがとうござります、あ、一応作業は終わりましたので、ご確認ください」

ノートパソコンを再起動し、立ち上がった画面 壁紙の犬の顔は実物よりからは少し賢く見えるか いくつかの見慣れないアプリケーションが起動したあと、例のメッシュページ『ライセンスはすでに有効期限が過ぎています。ライセンスの更新の手続きをしてください。コンピュータは危険な状態です』はもう現れなくなつた。

「あ、よかたわ～、ありがとうね、あら、ごめんなさい、お茶も入れずに」

「いえ、お構いなく、もつ帰らなこと、遅くなると、この先どうなるかわからせんから」

「そうね、じゃあ、気をつけてね」

多少のイヤミをこめたつもりだが、思つたとおり気づかなかつたらしい。あるいは気づかないふりをしているのか。

「はい、ありがとうござります。では、これで失礼します。また、なにか不具合がございましたら、こちらの連絡先までお願ひします」心から、そう思つていうときもあれば、一度と来るか、と思うこともある。この口はどうやらだつただろうか、あまりにもいろいろなことがあったので思い出すことも出来なくなつている。

隣の駅

経営までは歩いて15分か20分だろうか。まったく土地勘がない。医院のスタッフに聞いても、線路沿いに歩けばいいとしか、返つてこない。まあ、そこまでは問題なくいけるだろ。心配なのは本当にバスが動いているかどうかだ。非日常的な出来事の中で、それでも私は冷静さを保ち、自らの行動、判断になんら不安はなかつた。こういうときは動かないのが一番だ。だが、ここはあまりにも遠すぎる。少しでも家に近づいたほうがいいだろう。まずは、選択肢を増やすことだ。ここから離れない限り、選択肢は増えないだろう。そして私は出発すことになる。

非凡的な状況の中で、非凡的な存在に……。

第1章『揺れる街』終わり 2章に続く

第7話 1983年 理由ある反抗

まずは豪徳寺駅へ行つてみることにした。そこである程度の情報が得られるはずである。経堂駅へはそこから線路沿いに歩いていけばいい。不慣れな土地だ。確実な方法をとつたほうがいい。院長に挨拶をすませ、医院を後にする。帰り際の院長は最初のそれとは違ひ、少しばかり親近感を感じた。やはり、どんな形にせよ同じトラブルに巻き込まれたもの同士というのは、どことなく親しげに感じるようだ。

医院を出ると目の前に小学生の集団がぞろぞろと歩いている。頭には防災頭巾を被り、大人たちが何人か付き添つている。集団下校といふやつか。いよいよそれらしくなってきた。まさに大地震だ。しばし、その列を眺める。子供たちのことが気になる。しかし、どうすることもできない。とりあえず駅に着いたら、公衆電話からもう一度電話をしてみよう。しかし、心配なのはそれだけではない。無事子供たちが家に帰れたとしても、家の中がぐちゃぐちゃになっているかもしない。

本棚に不安定に積み上げられた読みかけの本。テレビの上においてあるプラモデル。そしてなによりも玄関においてある金魚の水槽おそらくいくつかの本は床に落ち、プラモデルは倒れて一部のパーツが折れてしまっているかもしれない。水槽の水は玄関を濡らしているだろう。さすがに棚が倒れたり、食器が落ちて割れたりはしていないだろう。

「いや、待てよ。そういえば……」

不思議なこともあるものだ。つい数日前になんとなく気になつて、テレビの上の2体を残して、他のプラモデルは箱に入ってしまった

のだった。いずれもアニメのロボットのプラモデルなのだが2体のうちの1体は土台があり、まず倒れることはないし、もう1体も足ががつちりしていて比較的安定感があるものだった。これが『虫の知らせ』というやつなのか？

「アッシュマーとリック・ディアスなら大丈夫か。やはり玄関の水槽だな。金魚が床の上で跳ねてたりしなきゃいいが」

玄関にはキャスター付きのプラスチック製収納ケースの上に、小さいサイズの水槽があり、お祭りの金魚すくいで持ち帰ってきた金魚が6匹泳いでいる。いや、そういうえば先月一匹死んで5匹になってしまったか。とりあえず、今はできることをやろう。何人かの同僚にメールを送る。

自分はこれから渋谷に向かいます。ただし、動けない可能性大。何かあつたらメールで連絡を！

妻には、家に帰れない可能性が高い。場合によつては品川に行くかもしれないといふとメールをうつた。

「一応、品川にもだしておくか」

私の両親は品川に住んでいる。渋谷までいければ品川までは山手通りをひたすら歩けばたどり着ける。実家に住んでいた頃、池袋で友人と飲んで、家に帰ろうとして寝過ごし、山手線を一周して池袋に戻ったところで電車がなくなつたことがある。タクシー乗り場はすごい人、酔つた勢いでそこから歩いて五反田あたりまで行つたことがある。流石に疲れてそこからタクシーを拾つたが、それに比べれば、渋谷から歩くことなど、さほど難しいことは思えなかつた、自転車でもあれば楽に……

「自転車があれば、ここからでも楽勝だな」

豪徳寺の駅には行き場を失つた人が数人、駅の公衆電話に並んでいた。まだ、その程度のレベルだつた。改札の前には『本日大地震のため前線運休』と赤のマジックで模造紙に書きなぐつてあつた。予想通り、まったく予想通り、慌てる必要もなければ、うろたえることもない。

「歩くか。経堂まで」

駅ひとつ、とはいへ、知らない土地である。線路沿いに歩いて、そのままいけるのかどうかわからない。携帯電話でマップを確認しながら、それでも電池は貴重なのでなるべく携帯の電源は節約して使わなければならぬ。こんなときにつつて、手持ちのノートパソコンのバッテリーは頼りない量しか残つていなかつた。ふと気が付くと、周りには自分と同じような境遇と思われる地元の人間ではなさそうなサラリーマン風の男女が足早に歩いている。タクシーにしろ、バスにしろ、豪徳寺では拉致が開かないと思うのは普通のことである。

線路沿いの道はたぶん、いつになく人通りが多くなつてゐる。普段はこんなに人が歩いていないのだろう。途中に放置してあるのかどうかわからないような自転車が何台か置いてある。いや、捨ててあるのか？

「これに乗つていけば、何とかなるかもな……ふん！中学生じゃあるまいし」

私は吐き捨てた。経堂駅に向かつて歩いてゐる間、私は中学生の頃の自分を見つめていた。あの頃、1982年か3年か……通つていた中学では校内暴力が横行し、まじめに勉強をしようという生徒は、学校に行かないか、行つても授業をサボつて、静かな場所を探して受験勉強にいそしんでいた。それくらい荒れていた。どんなにまじめな生徒でも、モラルの基準は校則でもなければ先生でも親で

もない。格好の悪いことはしたくなかったし、目立つこともしたくなかった。それがもつとも大事なルールだった。しかしそれはあくまでこの場所のローカルルール。中学を卒業して、高校に進めば、まったく違う世界があることも知っていた。だからみんな我慢した。

私は不良と呼ばれる連中と学校の外で遊び、校内では、まじめに授業をサボって受験勉強をしている連中と付き合っていた。そのどちらでもない連中、学校のルールに従うことを探わず、それでよしとしている連中とは、あまり馬が合わなかつた。校則を破ることは悪いことだとは、わかっている。しかし、大人たちは自分の言うことをきく生徒にだけの校則を当てはめ、耳を貸さない連中は放置していた。そんな不平等なルールに従う意味がどこにあるのだということを口に出しては言わないが、常にそういう目で大人たちを見、ルールに従う生徒たちを見ていた。

理由ある反抗。だから私は　僕は、人様の自転車を盗んで街中を走り回っていた。

第8話 白い自転車

私は時々1982年～3年に思いをはせる。あの時期、もしかしたら人生で一番輝いていたのかもしない。学校と自分、先生と自分、友人と自分、そして数々の悪友との伸び伸びとした遊びと、スポーツへの熱中、プラモデル、初めての彼女、交換日記、別れ、新しい出会い。毎日が『特別な日』だった。自転車を盗んだのは、溜まり場になっていた悪友のマンションに止めてあつた白い、少しくたびれた自転車だった。鍵はいつも挿しつぱなしだった。自転車で来たときはいつもその自転車の隣に止めていたが、ある日自転車がパンクをしてしまい、修理に出すのを面倒がついたときに、「ふと、ちょっと借りるつもりでそのまま乗ってしまった。ここへはしょっちゅう遊びに来ているし、次に来たときに、持ち主が気づけば、鍵をちゃんとかけるだろう。

自分勝手な考えだとわかつていても、世の中はもつと理不尽で自分勝手だということをなんとなく、肌で感じていた。そう感じてしまつことを他人のせいにしたまま「自分はこれくらいは許されるだろ」「世の中を甘く見たり「許されなければ、それはきっと、あつという間に警察に引き止められて、捕まってしまうだろう」と運試しを楽しんでみたりしていた。みんな好き勝手にやつている。

それなら自分はどこまで許されるのか？
世の中の仕組み、境界線を少しだけはみ出してみたい

2度ほど警察に止められたが、2回とも事なきを得た。盜難届けが出ていなかつたのだろう。でも、やがてその日は訪れた。3回目に呼び止められたとき、警察無線に聞きなれない言葉が流れた。そして親が呼ばれ、私は指紋を採取された。

「フンッ！ なんで、また、こんなことを思い出すかな」

その日を境に私の人生は輝きを失った。当時付き合っていた彼女とは、彼女の信仰している宗教のことや、いくつかの心のすれ違いの末に別れ、進学した高校で、彼女が自分によく知る友人と付き合っていると聞いたとき、私は恋愛に臆病になり、暗い高校時代をすごした。それでもきっと、クラスの誰よりも暗かつたわけではないし、その頃の友人とは今でも年賀状のやり取りくらいはある。だが、結局思い出すのは、1982年と3年のことばかりだ。

「この歳で自転車なんか盗んだら、シャレにならないだろう」

ふと、気が付くと、やけに人通りのない通りを歩いているのに気が付いた。ちょうど高架線の下になるのだが、一緒に歩いていると思っていたほかの同じ境遇の路頭に迷う人たちほどこかで道を曲がつたらしい、いや、自分が曲がってしまったのか。

「まったく、変なことを考えながら歩くから……」

人通りのない道に白い、少し使い古した自転車が置いてあつた。鍵はかかっていない。これはなにかの嫌がらせなのか。あの時とは違う、あのときの自分とは……そう思いながらも、私は自然と自転車の方に向かつて歩き始めた。それを引き寄せられるようにといえば、そうなのかもしれない。思わず手が自転車のハンドルに伸びた瞬間、自分の中である光景が思い浮かんだ。

「ゴメンね、これ、大事なものなんでしょう。私たちもいけなかつたのよ、ちゃんと鍵をかけておけばねえ」

自転車を持ち主の所に返したとき　その持ち主は老夫婦で、ほとんど自転車に乗ることがなかったのだという。私は自転車に何の細工もせず……名前や住所を書き換えたり、消したりせずにそのまま乗り回していたのだが、キー ホルダーだけはつけ換えていた。そ

れは友人からも立った地方で開催された博覧会の土産物だった。特に思いいれというものはなかつたのだが、使い慣れていた分、愛着はあつた。老夫婦は、そのキー ホルダーを私に手渡しながら、自分たちが鍵をかけていなかつたのも悪いと言つてくれたのである。その笑顔は忘れることができないものだつた。自分が挑みたかつた社会の境界線とこの老夫婦はまったく関係のないものだつた。情けなかつた。自分が情けなかつた。

私は頭をかきむしり、もと来た道を少し戻ろうと振り返つた。

するとそこには一人の老人がじつとこちらを見ている。いや、もしかしたら自分を見ているのではないかかもしれない。自転車の持ち主なのか？老人は一瞬、静かにうなずいたような気がした。私は軽く会釈をしそうになたが、老人のしぐさをもう一度よく観察してみると、それはうなずいているのではなく、少し震えているようだつた。こうして私は老人に出会つた。

静かなる老人に……

第9話 老人

「アアアアア……」

何か聞こえたような気がする。老人がしゃべつたのか。老人はただ、静かに震えていた。『老人』というのは、ある年齢を超えたたら『老人』というのではなく、生物としての目に見える衰え。皮膚や顔の皺やシミ、頭髪や眉毛の変色、髪質の劣化、口元の乾いた感じ。そして動作。瞬きの小ささゆつたりとした肢体の動き、指先や口先の震えなど、そういう要素全てを判定し、半分以上を満たしていれば『老人』とみなし、この場合、そのほぼ全ての項目で、その男は『老人』であつた。酷く小さい。小さいといふのは『背丈が』ということではなく、骨格、着ている服、手足、靴、頭、目や鼻や口、指の太さまでも、全てのサイズが子供のように小さかつた。

思い切つて尋ねてみた。

「あっ、あのー、ど・う・か・しま・した・かあ？」

ゆっくりとはつきりと聞こえるように私は老人に近寄りながら声をかけた。

「アアアアア……」

老人の目は、異様に奥にくぼんでおり、色素が薄くなってしまつた眉毛が、余計にそれを際立たせている。もしもこの老人の人相を質問されたら10人が10人『とても小さくて、目が奥にくぼんだ老人』と答えるだろう。

「ありがとうよ」

どうも、そういう感じに聞こえるのだが、礼をいわれるようなことなど、覚えない。失礼だと思いながらも、私はもう一度聞き返した。老人の耳元に近づき、しかし失礼のないように近づきすぎず、少しがみながら、さつきの言葉を更にゆっくり繰り返した。

「ど・う・か・し・ま・し・た・か・あ」

近づいてみてわかつたのだが、老人の肌艶は、90歳をもし越えているというのなら、私の想像をはるかに超えて、きれいな肌をしていた。しわやシミはそれこそ、最低限しかない。肌がくすんで見えたのは、どうやら汚れているだけのようだ。それも妙な話なのだが、浮浪者には見えなかつた。衣服は小さいが品のよさそうな生地で、むしろこぎれいといつていい。

「すまんが、駅まで、そこの駅まで送つてくれんか。アア」明らかに最初に聞こえた「アアアアア……」という識別がでいな音声ではなく、はつきりと、ゆっくりと、しつかりとした口調で老人は私に訴えてきた。たぶん、最初に話しかけた時は、タンが絡んで、くごもつたのだろう。今は多少空気が抜けるような音が混じるが、はつきりと聞き取れた。

「駅ですね。駅つて経堂駅、経堂ですか」

先ほどより少し早めで小さく つまり普通に話してみる。すると老人は大きく頭を立てに振つて、答えてくれた。耳はしつかりしているようだつた。もう一度普通の会話の調子で話しかけてみる。「私もこのあたりの人間じゃないんで、場所がよくわからないんですけど、どの道を行けばいいか知つてますか? わかりますか?」

すると老人は両手を後ろ、腰のほうに組んでゆっくりと歩き出した。その歩幅は驚くほど小さく、駅までこのペースで行つたら、どれだけ時間がかかるのかと、私に心配をさせるほどだつた。しかし、急いで仕方のないことだ。こういう非常時、老人がひとりでいるのはあまり良いことではない。駅までというのであれば、構わないだろう。どうせ、今日は長い一日になるに違ひないのだから。

私は方から下げるカバンを右から左にかけなおし、老人の右側を歩いた。道の真ん中を歩こうとする老人を道路の左側に少しずつ誘導した。私の身長は170センチほどだ。いや、正確には168・

5センチ。170センチはない。その私の肩の辺りに老人の頭があつた。腰が曲がっているわけでも、姿勢が悪いわけでもない。どことなくその佇まいに違和感を感じたが、対して気にはならなかつた。なぜならその時は、それほど長く老人と行動をともにすることはないと思っていたからである。私は最初に自らを名乗る機会と老人の名前を聞く機会を失つてしまつた。

老人と出会つた高架下から少し来た道を戻り、車道の道なりではなく、線路脇にまっすぐ連なる細い道の入り口まで戻つた。どうやら、みんなここを通つていつたらしい。考え方をしながら歩くから、こんなところで道を間違える。まあ、それでこの老人の手助けができたのだから、それはそれで、悪いことではないのか。

道幅が狭いので私が老人の前にでた。老人に歩幅をあわせて私なりにゆっくりと歩く。それでも、老人がちゃんとついて来るのが気になり、時々後ろを振り向く。しかし、いつ振り向いても、老人と私の距離は一致の感覚を保つていて。開きすぎず、縮まりすぎず。少し意識をしてスピードを上げてみるが、やはり老人はぴったりと私との距離を保つてついて来る。少し不気味に思いながら、そのことを深く考えはしなかつた。こんな出先で幽霊に取り付かれなきやならない理由は見当たらない。そういうものを信じないわけではないが、私に限つてはそんなものに出会つことはないと思つていた。

5分もしないうちに経堂駅らしきものが見えてきた。人だかり公衆電話とタクシー乗り場は結構な行列ができていた。バス停にも数人ほど並んでいる。良かつた、これなら座れるか。いや、そもそもバスが來るのかどうかもわかりやしない。『さて、駅につきましたよ』と声をかけようとしたら、老人はいなかつた……なんていふ事が起きるかと振り向くと、そこには小さな老人が静かに歩いている。そう、そんなんことは、そう簡単に起きることじやない。

「もうすぐ、駅に着くけど、おじいさん、ここでよかつたのかな？」
大丈夫だとわかつていても、わたしの口調はゆっくりとはつきり口を開ける年寄りを相手にしたしゃべり方になつてしまつ。もしか

したら、嫌がられるかもしれないと思いながらも、そうなつてしまふものはしかたがない。

「アアアアア……」

それは最初にこの老人から聞いた声と同じものだった。なんといつているのかわからない。かぎりなく『ありがとう』といつているように聞こえるのだが、どこかちがうよな気もする。私は仕方なく、わかつたようなふりをして、駅の改札のところまできた。豪徳寺と同じように改札には『全線不通』としか書いていない。

「おじいちゃん、どこまで行くのかな？今日はここから電車に乗るのは無理みたいだけど、タクシー並ぶ？だいぶかかりそうだけど……家族に電話をするにしても並ばないといけないし、どうしようかな？」

もはや自問自答である。

「アアアアア……」

駅のタクシー乗り場には20人ほど人が並んでいる。しかし、先ほどから一台もタクシーは現れない。当然だ。ここに着く前に、誰かが拾ってしまうだろうし、大一、乗っている客の目的地までつけないで立ち往生してるかもしれない。道路の混雑は容易に想像できた。不意に私の心中に心配の種が芽を吹きはじめた。この老人はもしかしたらとんでもない御荷物になるかもしれない。

老人は静かに私の後をついて来る。とりあえずバス停に行つて渋谷行きのバスを確認する。バス停には主婦や学生が並んでいる。最初見たときより人が増えている。20人くらいか、これならバスが来てくれれば座つて渋谷まではいけそうだ。

「おじいちゃん、私は渋谷まで行かなきやならないんだけど、おじいちゃんはどこまで行くのかな？このバスで行けるところかな？」

老人はバス停に設置してある掲示板をしばらく眺めると、ボソリと呟いた。

「バスはもうじき来る。『アアアアア』までバスに乗つて行くしかあるまい」

肝心の行き先は良く聞き取れなかつたが、ともかく本人が行き先を確認したのだから大丈夫だろうと、そう割り切るしかなかつた。聴き直したところで、私の耳に判別できるという自信がなかつた。聴きなれない土地の名前を、聴きづらい発音で聞かされても、老人に嫌な思いをさせるだけのような気がした。

いや、面倒だと思つたからかもしれない。

5分もしないうちに渋谷行きのバスがロータリーに入つてきた。タクシー乗り場からも何人かバスに乗ろうと人が集まつてくる。あつという間にバス停は長蛇の列になつていて。座つていけるのだから、それを幸運だと思うことにした。まあ、老人のことも含めて、神様が抱き合わせでよこしたのだと思えばいい。

「よかつたねおじいちゃん、バスが来……」

そういうながら後ろを振り向くと、老人の姿はない。

「あ、あれ、おじいちゃん」

あたりを見回しても老人の姿はなかつた。後ろに並んでいる女子高生に尋ねても気付かなかつたという。はたして、自分は本当に老人を連れてここまで来たのだろうか。考える間もなく、バスは停留所に止まり、中から運転手が降りてきて乗客に声をかけた。

「すいません、地震の影響で道路が大変込み合つております。終点の渋谷までどのくらい時間がかかるかわりません。今お並び頂いている方、全員は乗れないかもしませんが、その際はご了承ください

『非日常』という感覚が少しづつだが実感として沸いてきた。私はもう一度あたりを見回して老人の姿を搜してみたが、やはり姿はない。すぐに乗客がバスに乗り込み始めた。もう、行くしかない。今行かなければ、次はどうなるかわからない。私はしかたなく、バスに乗り込んだ。私は後ろから2番目の椅子に座ることができたが、かなりの乗客を残して、バスはすぐに満員になり、発車した。駅のロータリーから出て、一般的の道路に入ったところすでに渋滞に巻き込まれた。

「これは長くなりそうだ」

私は振り返らなかつた。バスに乗れなかつた人の列に、もし老人の姿を見つけたとしたら、きっと気分が悪いに違いない。そんなことは無意味なことだ。私にとつても、そしてあの老人にとつても。

第11話 渋谷へ

路線バスの座席数は25前後しかない。立ち席を含めて60人から70人が定員だ。このバスには定員ぎりぎりか、少しオーバーしている状態で息苦しさを感じる。その息苦しさは、空間的な見た目の窮屈さもさることながら、誰一人として談笑をしない、エレベーターの中のような沈黙の息苦しさも含まれていた。誰も何も口にしない。ただじつと何かを堪えていた。それは不安であったり、不満であったり、不快であったり、不審であったり、ともかく、ありとあらゆる負のイメージが車内を包み込んでいた。

私はバスを正面から見て左側の後ろから2番目の通路側の座席から、その光景を眺めていた。座れたことはよかつたが、当然に後ろめたさもある。それは老人のこととは無関係に、普段なら席を譲つてあげたいようなお年寄も大勢いる。しかし身動きは取れない。この席はバスの後輪が真下にあるので、わたしの大きな身体ではやや狭く、窓側に座つた人が途中で降りようと思つても、どうやつたらそれが可能なのか、考えるだけで憂鬱になる。隣に座つているのは大きめのレジ袋を二つ持つた中年の女性だった。おそらく主婦だろう。渋谷まで行くのであればいいのだが……

眠つてしまおう。

そうは思つてみたものの隣の主婦のようには眠れなかつた。何もしないでいるところなことを考えない。暇を持て余して渋谷までどのくらいかかるのかを携帯電話で調べてみる。距離にして7キロちょっと 所要時間は30分強か。窓の外の景色はあまり代わり映えしない。自然視線は社内のちょっとした光景に目が行く。目の前の席には背の高い若い男性といかにもまじめそうな それは制服

の着こなしだけでなく、彼女自身がかもし出す雰囲気というものが
らそう思ったのだが、女子高生が座っていた。どちらも観察の対象
としては面白くなく、まったく動かない夜行性の生き物を動物園で
見ていくようだつた。いわゆるチャラ男であつたり、落ち着きな
く携帯をいじり倒す女子高生であれば、好奇と軽蔑の目でその光景
を眺めながら、適当なことをツイッターでつぶやいて暇をつぶすの
に……眠ることのできない自分が疎ましかつた。

待てよそーか！ 携帯電話で通話やメールはできなくてもツイッ
ターなら……

タイムラインからいろんな情報を得られるかもしれない。もつと
もサーバーが落ちている可能性も大いに考えられたが、思いのほか
あっさりとログインすることが出来た。そしてそこには信じられな
い情報が次から次へと流れてきていた。

JR都内全線運休みたいよ。地下鉄も私鉄もダメみたい。
タクシーやつと捕まえたけど、すごい渋滞してる。メータがすご
い事に○○○

家に帰れなくなつた人、都内の各ホテルで一時受け入れしている
みたいですよ

【拡散希望】都内で帰宅できない人を受け入れている施設は次の
通りです……

津波警報が出ている地域の方、早くに逃げて！

千葉の工場で火災、有毒ガスが出ているらしいから避難して！

無理に帰宅しようとしないで！今動いても混乱するだけ！

東北地方、太平洋側は津波でかなりの数の死者が出ている模様

まるで、ハリウッド映画のトレーラーを見せられているようだつた。バスの乗客の中でこのことを知っている人はどのくらいいるのだろうか？周りを見渡すと何人かは携帯端末を操作しているようだったが、その表情からは何もうかがいることは出来ないみんな表情が死んでいる。経堂駅前からバスに乗り込んでかれこれ1時間は経過している。

重苦しくも心地いい沈黙　　沈黙に耐えさえすれば、他人のこと
を気にしないで済む渋滞　　が続いている。後部座席の通路を挟んで反対側の窓際に座るサラリーマン風の黒いコートをきた男がワンセグ付きの携帯で、テレビの一コースを見ているようだ。この位置からはどうな内容か細かいことはわからないが、日本地図らしき形、そしてその太平洋側の沿岸地域が真っ赤に染められているのがわかつた。最初は番組の中でいろんなところの中継を流しているのだと思ったが、どうやらその男がチャンネルを次から次へと回しているようだつた。それでも津波警報の情報がわかつたのは、どのチャンネルも同じような映像を流しているからであって、つまりは、それだけ『とんでもない事態』が起きていることを示している。

私はこの時点で葛西の自宅に帰ることを断念した。陸続きといつても荒川を渡らなければ、先には進めない。はたして、橋を渡ることができるのか？通行規制がかかっている可能性もある。無理に行くことはない。大丈夫、きっとみんな無事だ。それよりも品川の実家のほうが心配だ。最近足腰が弱ってきた父親も心配だが、母親

だつてパニックになつていいかもしない。まだ実家を出でていない妹は、仕事先から帰つてこれないでいるかもしない。

メールを確認するも返事は返つてきていない。こうこうときは自動配信は当てにならない。メール受信の操作を行つてみるがやはり誰からもメールは来ていない。念のためもう一度妻と母にメールを送つた後ツイッターを確認する。タイムライン上によく知る仲間を見つけた。どうやら彼らも地震の影響で悪戦苦闘しているようだ。高層ビルに閉じ込められたり、移動途中の電車の中で足止めを食らつていたりしている。そういうメンバーと情報交換してわかつたこと。それは私の初期の予測をはるかに超える天災が、東北を、ニッポンを襲つたという事実だった。

第1-2話 タイムライン

携帯でウェブに接続し、定期的に情報をチェックする。ツイッターのタイムライン上に流れる内容は、いくつかに分類される。まず発信者が2種類。自らが安全な場所にして、知りえる情報を適時にネットにあげている人。役に立つ情報が多い。特に関西地域からの投稿には阪神淡路大震災の経験を基にした有用なものが多かつた。もうひとつは助けを求める声とそれを拡散するリツイートと呼ばれるもの。リツイートとは誰かのツイッター上のつぶやきをそのまま引用して、自分のつぶやきをフォローしてくれる人に知らせる方法である。つまり100人のフォロワーがいる人のつぶやきは100人に伝わり、さらにそれを一万人のフォロワーがいる人がリツイートすることで、ひとつの情報が加速度的に広がる＝拡散するわけである。

ニュースサイトや報道機関など確実な情報ソースからの引用と現地でツイートをしている人の情報を同時に見ることで、より具体的で細かいディティールで今起きていることを知ることが出来た。救助を求める内容のリツイート、交通手段に関する質問、停電、断水などライフラインの情報、尋ね人など　それは不謹慎ながら今までに経験したことのない臨場感のあるニュースの見方だった。東北地方の被害の甚大さは、計り知れないものであり、あの時点ですべての情報を知ることが出来たとしても、まったく実感がわかなかつただろう。私の関心を引いたのはどの範囲まで広がっているかということだった。

九段会館で死傷者が出たというニュース。それでと横浜でボウリング上の屋根が落ちたというニュース。この二つから自分の実家や自宅がどんな状態なのか想定をしてみる。とても楽観的な状況では

ないように思えたのだが、バスの中はまるでそんなことは無関係な世界のように沈黙を守り続けていた。一体被害はどのあたりまで広がっているのか？ 度重なる余震、津波警報は太平洋沿岸地域ほぼ全域にわたっている。津波の第一波、第二波によって北陸地方に甚大な被害が出ていたようだ。さらに福島の原発が大きな被害を受けていたという話まであがつていた。情報が欲しい。正確な情報が遠く離れた被災地の情報ではなく、これから向かう行き先、家族の住む地域、友人・知人の安否。どんなにタイムラインが凄い勢いで流れても、今知りたい情報は、なかなか得ることができなかつた。

非常時　人はこうしてひとところにまとまつてゐるうちは、ある程度慎重でいられるのも知れない。もしこれが、『ひとりだけ』という状況になつてしまつたら、落ち着いていられないだろう。だが『何も知らずに落ち着いている』という状況は、私をかえつて不安にさせ、苛立たせた。ひとたび身に危険が及ぶような情報……たとえば、どこかの工場の火災が原因で有毒ガスが大量に発生したとか、原子力発電所が制御不能になつたという情報がバスの車内に流れれば、たちまちに不安が爆発しパニックを起こすのではないか。たとえば、このバスの運転手は無線などの通信手段をつかつてすでにそういう情報を知つていて、隠しているのではないか。私の妄想は時間が経つに連れ大きく、たくましく、不愉快なものになつていつた。

バスの外に目をやれば、歩道を歩く人の表情がいちいち気になる。談笑をしながら足早に通り過ぎていく女子高生。どこか不安げにあたりを見回しながら歩くサラリーマン。携帯電話を眺めながらうろうろしている若者。次々と追い越されていくおばあさんは、それでも急いでいるように見えた。道行く人の何人かはこちらの様子を伺い、気の毒そうな顔をしているように見える。そうでないとしても、そう見えてしまう。

もしかしたら渋谷駅周辺からこちらのほうへ歩いてきているのか？

土地勘のない私には、これが日常の光景なのか、そうでないのか判断ができない。何気ない風景のようであっても、人々の行動には一定の違和感を感じる。その根拠は手元の画面　　タイムライン上に次から次へと流れて繰る非日常的なつぶやきの数々だ。そう、このタイムラインと外の風景はリアルとヴァーチャルという関係性ではなく、地続きになつていていう真実＝リアルな現実なのだ。

混雜したエレベータ状態のバスの車内に比べれば、ネットの世界は快適だつた。あまりにも物理的な距離が近づきすぎると、人は心を開きづらくなるのだろうか。あたりを見回してもみんなそれに携帯を眺め、うつむいているだけである。或いは目を瞑り、必死に何かに耐えている。誰も手を差し伸べようともしなければ声をかけようともしない。タイムライン上ではすでにある程度のコミュニケーション情報を共有し、それをまとめてより正確な情報、よりきめ細かい情報を届けようという動きが見え始めている。デマに対するカウンターも早い。静止した物理的空間の中で、躍動するヴァーチャルな世界に繋がっているという違和感が盛んに私のある感覚を刺激する。

それは10歳のころから私を悩まし続けているある心象風景。いや、単純に悪夢と言つたほうがわかりやすい。そして実際それは悪夢というほかない。人に話してもその恐怖は伝わらない。恐れているのは、怯えているのは私だけなのだから。

このバスはある意味安全地帯である。外で恐ろしい事が起きていたとしても、ここにいればある程度のことは防ぐことができる。しかも大勢人がいる。『外に出なければ安全だ』という状況になつた

とき、人はどこまでそのことを信じられ、それを疑うことしない
ように耐えられるだろうか？ ひとたび誰かが不安や疑問を口にす
れば、たちまち意見はわかれ、やがて一つの方向を示す、衝撃的な
事実、或いはさも、事実のようなことがその中に示される。極限状
態の中での選択を迫られ、人は恐れ、怯え、競い、争い、疑い、そ
して何かにすがろうとする。例えそれがどんな狂氣であつたとして
も……

人が人でなくなる狂氣を私はごく身近な体験として知っている。いや、それは一種の疑似体験 誰もが必ずみるもの 悪夢である。代表的なものは高いところから落ちる夢や化物に追いかかれれる夢だが、私の場合は、『リビング・デッド』である。あえてゾンビと表現しないのは、夢の中では設定があやふやであるからで、屍食鬼がごとき、死肉食いのシーンは夢には登場しない。『感染者』と説明したほうが適切かもしだい。

悪夢の入り口はともかく、最後はいつもこうである 『感染者』の群れに追い詰められ、どうにか身を隠す場所を見つけてそこに逃げ込む。それは廃屋の小屋であったり、学校の掃除用具のロッカーであつたり、トイレだつたりする。いずれも内側からしっかりと鍵が掛けられない。ドアを手でしっかりと押さえなければ、簡単に外から開けられてしまう。『感染者』は私の存在に気づき、次から次へと現れ、ドアをこじ開けよとする。私は必死にドアを押さえるが、とうとう力尽きてしまうか或いは一緒にその場所に逃げ込んだ仲間が感染してしまい、ドアを開けてしまつ。『感染者』の群れがなだれ込む。無数の手が私めがけて伸びてくる。冷たく青白い手。その手は私の服を引き裂き、髪の毛をむしり取る。手足をがっちりと握られ身動きが取れなくなつたところに、奴らは大きな口を開けてところ構わずかぶりつく。彼らと視線が合うことはない。彼らが見つめているもの、それは私の腕であり、太ももであり、要は食料としての私の肉なのだ。私は抗うこともできず絶望の中で目を覚ますことになる。その夢をみた夜はもう眠ることもできず、夜が明けるのを震えながら待つしかなかつた。

大人になつてから見る回数こそ減りはしたもの、必ず年に数回

は悪夢につながっていた。

ついさっきまで普通に行動していた人　家族や友人や同僚が『感染者』となり、私を襲ってくる　人が人でなくなる狂氣を目の当たりにして、私は逃げ惑うしかない。怪物や幽霊の類に襲われて逃げ惑う夢は、多分一般的な悪夢として誰もが見るものだと思う。もちろんそういう夢も見るのが、目が覚めてしまえばどうということはない。しかし、『感染者』に襲われる夢は根本的な恐怖の構造が違う。その違いをはっきりと自覚できるようになつたのは、高校生くらいの頃か、或いは中学生くらいの頃だったか、はっきりとは思い出せないが、追い詰められる恐怖だけではなく『感染』をきっかけに、人が豹変してしまうことへの恐怖が加わる。そして、私は最後までそれに抵抗し、逃げ、そして最後に襲われてしまうという絶望感。

「そんなことにはならないや」

自分で自分に言い聞かせる。ここは夢とは違う現実の世界。みんな『こんな状況』でもある程度の理性を保つて行動することができているじゃないか　そう思う。だが、確信はない。『こんな状況』は、おそらくここにいる誰もが遭遇したことはないだろう。路線バスという狭い空間の中でこそ、そして情報が閉鎖された状況だからこそ、平静を装つていられたのかもしれない。バスが無事に渋谷駅にたどり着き、そこでそでにある程度の混乱が起きていたら……我先にと争い、バスから飛び降りて倒れるものを踏み潰して己の身の安全を確保しようとするかもしれない。そうだとすれば、あの老人と経堂駅ではぐれたことはよかつたのかもしれない。もし老人と行動をともにしていたら……

「考えすぎだ」

だが、多分紙一重の状況ではないだろうか? そうなつたとき、自

分はどうなるのだろう。正義のヒーローなんかにはなれない。誰かに手を差し伸べるなど、できないだろう。でもあの老人を放つて置けるだろうか。私がひとり妄想の中にふけっているとふと視線の中にあるえないものが目に入った。

「あ、あれは、あのときの老人……いや人違いか？」

経堂駅のバス停ではぐれてしまつたと思っていたあの老人が満員の路線バスの中　いわゆる優先席の近くに見えたような気がした。人と人のわずかな隙間からチラリチラリと老人らしき姿が見える。

『とても小さくて、目が奥にくぼんだ老人』

「なんてことだ！」

ただただ、渋谷に早く着くことを　いや、すでにここは渋谷なのだが、バスが人を降ろせるところまであと200メートルというところで、バスはなかなか前に進まない。私はいたたまれない気持ちになつた。自分がしつかりあの老人をサポートしていれば、こんなことには……ふと老人と目が合つた。老人はとても穏やかな表情で私を見つめていた。微笑むのでもなく、会釈をするわけでもなく。ただ、ただ、穏やかにそこに佇んでいたのである。その姿に私の心は大きく揺らいだ。

「バスを降りたら、あの老人に最後まで付き合おう」

私がそう心に決めたとき、バスがようやく動き出し、ほどなくして渋谷駅の停留所についた。渋谷の駅前は信じられないほどの人間で溢れかえっていた。一瞬、ドキつとしたが、その佇まいは思いのほか穏やかだつた。私が想像していた『パニック』とは違う『静かなる群集』は、まるでムクドリの集団のようにざわついてはいたが、決して乱れることはなかつた。

「大変お疲れ様でした。渋谷到着です。大変混雑しております。バスをお降りになりましたら、立ち止まらずにお進みください。どなた様もお忘れ物のないよう、お気をつけてお帰りください」

バスの運転手は乗客に注意を促しながらも、その声には一つの仕事を成し遂げたという達成感よりも、この後もしばらく続くであろう非常事態の中での激務に対する疲労感が漂っていた。無理もない。ご苦労様でしたと声をかけたい気分だが、それができるような状況ではなかつた。私は老人の姿を目で追いながら、バスを降りた。体の小さな老人は人の影に隠れてすぐに見えなくなつてしまい、探し出すのが大変だつたが、どうにか先に下りた老人を呼び止められる距離まで近づいた。

だが、私は一瞬躊躇した。なんと言葉をかければいいのかわからず、言葉のないまま老人の肩に手を触れようとした。が、私はそれに失敗をした。老人と私の間を一人のサラリーマンが横切る。次の瞬間、私は老人を再び見失つてしまつたのである。まわりを見回すと、そこには気分が悪くなるほどの人の頭が右へ左へと動き回つている。私は一瞬空間的な感覚を失いそうになつた。

「ここに……」

ふと背後から声がする。振り向くとそこには先ほど見失つたあの老人が静かに立つていた。私は老人のおかげで自分を落ち着かす事ができたようだ。自然に言葉が口をついて出た。

「おじいちゃん。心配してたんだよ。大丈夫かい？」

老人は静かに私に微笑みかけゆつくりとうなずいた。こうして私は、再び老人と行動をともにすることになつた。時計は夜7時をとつくに回つていた。

第14話 再びバスへ

3月11日午後2時46分。私は仕事で訪れていた世田谷の豪徳寺駅周辺で、今までに経験したことのない大きな地震に遭遇した。その後も何度か大きな余震が街を揺さぶる 東日本大震災は、まだ私の目にはその一部しか見えていなかつた。都内の交通機関は麻痺し、携帯電話も繋がらず、会社や家族と連絡が取れない。移動する手段を求めて隣の駅まで歩く。その途中で一人の老人と出会い行動を共にすることになった。経堂駅に着くと運良く渋谷駅に向かう路線バスに乗ることが出来た。老人も一緒に渋谷に行くはずだつたのだがバスに乗り込む際に老人とはぐれてしまった。しかたがない。そう思つていたのだが……いよいよ渋谷駅に着くというときに、はぐれてしまつたと思つていた老人が一緒のバスに乗つていることに気づいた。バスを降り、再び老人と行動を共にすることになった。

「トイレは大丈夫ですか？まだ先は長いですから、ここで用をたして行きましょう」

老人はうなづくはしなかつたが、私の申し入れを承知したといふ目をしたので老人を渋谷駅前の公衆トイレへ案内した。渋谷の街は思つていたほど混乱はない。お互いに知りえた情報を交換し、どうやつたら目的地に着くことが出来るのかを模索している人がほとんどで、大震災という未曾有の災害が起きていることの恐れよりも、まずは家に帰ることが大事といった感じだつた。携帯電話は通じない。それでも何かの間違えで通じることもあるようで、「何度もリダイヤルしたらやつと繋がつた」と、通りすがりのOさんが話していた。実際、渋谷に来たものの、ここで手詰まりという人は他にやることがない。都内の鉄道はすべてストップしており、JRはすでに今日中の復旧はないという案内を出していた。地下鉄が一部復旧するようだという情報をところどころで耳にする。電話が通じた人は

車で迎えに来るよつにと依頼をしているようだが、それこそ混乱を招くだけだ。すでに道路は身動きが出来ない状態になりつつある。

「おじいちゃん、ここからどうする？私は両親が品川に住んでいるので、実家に世話をにならうと思つてるんです。渋谷から品川までなら歩いてでも行けますから」

品川と老人の行きたい方角がまったく違うなら違うで、この際、老人に付き合うのもいいと思っていた。どのみちまともな時間には帰れやしない。家のことは心配だが、荒川を越えて江戸川区に入るのはいろいろと不確定要素がある。橋、通行規制、液状化現象。今のところ江戸川区周辺に大きな被害が出ているというニュースはない。千葉沖で火災が発生しているらしいがその影響があるとは思えない。有害物質が発生しているという話もあるが、流石に西葛西までは届かないだろう。しかし

「心配かい？」

「えっ？」

「心配はいらんよ。何も心配はいらんよ」

老人は、私に心配はないと微笑みながら言つた。いや、もしかしたら微笑んではいないかも知れない。老人の顔のシワが微笑んでいるように見えるのかも知れない。だが、奥まった目のくぼみは、どことなく不気味さを感じる。じつと見てみると、その中に吸い込まれそうな馬鹿げた錯覚に陥りそうになる。

「おじいちゃんの」家族も心配しているでしょう？連絡をとる方法があれば……あつ、公衆電話なら通じるはずです。電話番号わかりますか？」

老人は寂しそうに首を振る。さつきの笑顔とはまったく違う、寂

しそうな表情も、もしかしたら老人のシワがそう見せて いるだけなのかもしない。年寄には年寄でそれなりに事情があるのだろう。私はそれ以上、老人の家族のことに触れることは、やめることにした。とはいえ、行き先を聽かないわけにもいかない。

「大森へ……」

老人は目をふせたまま静かに言つた。

「ワシは大森へ行きたいんじゃ。大森はどうやつたらいいのか……」

「大森ならJRで品川から二つ先の駅です。品川から歩くと結構あります、品川までいければ何とかなるでしょう。じゃあ一緒に品川まで行きましょうか？」

老人は静かに首を立てに振つた。歩きながら、ゆっくりゆっくり何度も。

公衆トイレの前は一段と混雑していた。用をたそうと並んでいる人、タバコを吸う人、それに情報を交換する人でごった返していた。「もし、トイレの必要がなかつたら、ここで待つていて下さい。私はトイレをすませたら、すぐにここに戻りますから」

老人は黙つて動こうとしない。私はかまわず人ごみの中を掻き分け、トイレに並ぶ列を見分け最後尾に並ぶ。私の前に並ぶ二人組みのサラリーマン 年齢は明らかに自分よりも上で、多分、社会的地位も上なのだろう が話をしている。どうやら渋谷から出ているバスのことを話しているようだ。私はさり気なく二人の会話を割り込んだ。

「すいません。そのバスは、どこまで行くんですか？」

「田町行きのバスが動いているらしいよ。乗り場は駅の反対側だよ」「あ、バスター・ミナルですね。わかります。ありがとうございます」

「まあ、もつとも何時間かかるか、わかりやしないけどな
「え、まあ、歩いたほうが早いとも思うのですが、なにぶん連れが
いるもので」

「そうかい？まあ、あちこち歩き廻ったところで、どこも人で一杯
さ。動かないのがいいのかもしれんが」

「そうなんです。じつとここで待つのもどうかと……人がどんどん
増えますからね」

「あなたがたもそのバスに？」

「いや、今その話をしていたところですね。田町に出たところで、ど
うにもならないって話をね」

トイレで用をすませ老人を探す。老人は言われたとおりにそこに
じつと立つて待っていたようだ。

「トイレ本当に大丈夫ですか？田町までいくバスがあるそうです。
とりあえずそれに乗つてみましょうか？町田まで行く間に状況も少
し変わるものかもしれないし」

こうして私は、再び老人と一緒にバスに乗ることにした。

第15話 多くの憂鬱を乗せて

バスを待つまでの間、何度も家に電話をしようとしたが、まったく通じる気配がなかつた。メールを書く。

件名：帰れない

本文：渋谷まで来たけど、交通機関が麻痺してゐる。今日は品川の実家に行くから、家のことをよろしく。何かあつたらメールか、実家に連絡してくれ

はたしてこのメールを妻が今日中に読むかどうかはわからない。通常携帯電話のメールは、サーバーにメールが届いたことを携帯に知らせる仕組みになつていて。だが今日のような非常時は、『新規メールを受信』という操作をしないと、サーバーからメールは自動的に配信されない可能性が高い。理屈がわかっている人間にはピントくる話だろうが、そこを妻や実家の母に求めるのは無理だろう。テレビやラジオでは、おそらく混乱と混雑を防止するため、そういう情報も流さないだろう。

バッテリーの残量を気にしながら、時々ツイッターを使って情報をチェックする。知り合いが品川方面から渋谷方面へ徒歩で帰宅しようとしている様子や会社に泊まるうとしたらビルから追い出されたという話など、随時情報が入つてくる。こういうときにデジタルデバイスをある程度使いこなせる仲間がいるのは心強い。総合的に判断して、今の状況でバスで品川方面への移動は、かなり時間がかかるだろう。しかし、老人を歩かせるわけにも行かない。行動がこういう形で制限されるのはあらかじめ想定していたことだが、やはりどこか訝然としないものがある。

老人は、静かにそこに佇み、私のそばから離れようとしない。『この老人をひとりきりにしてはおけない』という感情が私の中に芽生え始めているのを感じるが、素直にそれを認める気にはなれないでいた。不用意に馴れ合いになるのがいやだった。

都営バスのターミナルは普段は見られないような人ばかりになっていた。先行のバスが出たばかりなのだろうか。田町駅行きのバスの列は運よく20人ほどの列でまだ座れる可能性があった。まあ、こんな状況でも『誰も老人に席に譲らない』ということはないだろうと私は思った。

日本人のそういうところは、まだ、信じられる。

バスを待っている間、老人と会話を交わすことはほとんどなかつた。後ろや前に並んでいる人とは、こんな場合に即した会話をした。それよりも何よりも私には寒さがこたえた。老人は決して着込んでいるという感じではないようだが、私よりは暖かそうな服装であった。

「寒くはないですか？」とたずねても一コ一コしながら首を振るだけだった。そういう自分こそ、コートを事務所においてきたことを後悔していた。

帰りが夜になるなんて、誰が想像できるものか！

渋谷駅に到着して30分が経過する。駅の周りは人で溢れ返っていた。

「本当にバスはくるんですかね」

私たちのすぐ後ろに並んだ買い物帰りといった感じの中年の女性

が話しかけてきた。

「そうですね。経堂駅から渋谷までバスで来たんですが、ものすごく渋滞してましたからね。たぶん普段の何倍もかかったと思います。どこの道路も渋滞しているでしょう」

不意に一人の老婆が駅のほうからこちらに近づいてきた。列の周りをうろついたしながら、一瞬列の間に入り込む。険悪な空気が漂つ。当たり前だ。しかし、そういうことも仕方がないようにも思える。自分が座席に座って、目の前にあの老婆がいたら、やはり席は譲るだろう。しかし、それはバスに乗つてからのルールである。今はバスに乗るためのルールだ。『お年寄を列の最前列へ案内しましょう』^{〔フ〕}というのは、あまり日常的なフレイズではない。

「列の最後尾はあっちだよ」ひとりの中年男性が低く静かで、威圧感のある声でいう。老婆は列の後ろへは並ばずに、そのまま駅の方へと消えていった。誰にとっても後味の悪さが残る。自分の席を譲るならともかく、自分の並んでいる列の前に並ばせるわけには行かない。心があつても術がない。

そこにようやくバスが来る。

「おじいちゃん、僕から離れないでね」

私には覚悟があった。経堂から渋谷までのバスとは違い、このバスの車内では、きっと嫌な思いを何度もするだろう。今からでも列を離れて、歩いて品川方面に向かつたほうがいいと思えた。しかし、この老人のことがある。

いいや、今日は会社を出たときから、覚悟は出来ていたんだ。いいことなんかひとつもあるとは期待していなかつたさ。それが少しばかり、長引くだけのことさ。それに

それでもこの老人を無事に目的地まで送り届けることが出来たの

なら、なにかを成し遂げたという達成感、或いはもう少し崇高な何かを得られるかもしねり。

今日は、それでいいじゃないか……

バスの扉が開き、運転手が前で何かを叫んでいる。どうやら『遅れて申し訳ありません』ということと『道路が混雑しているため、田町までどのくらい時間がかかるかわかりません』という趣旨のことを繰り返し言っているようだった。

嫌な感じだ。やはり、止めたほうがいいのか。

しかし、バスに並ぶ列は進み、あつという間にバスの入り口まで来てしまった。もう引き返すことは出来ない。それに少なくとも塞さはしのげるじゃないか。そう自分を納得させ、老人を行かせて、バスに乗り込んだ。バスの中は乗り込んだ人が、まるで工場のベルトコンベアのように次々と座席に座つていく。ともかく人がたくさん乗るのだから、奥まで行かなくてはならない。どうにかぎりぎり、老人をバスの出口近くの座席に座らせることが出来たが、私はバスの最後尾に立つことになった。すぐに老人は人の死角に入り見えなくなってしまった。バスの外にはおよそバスに乗り込めないだろう人の列が見える。恨めしそうというよりは残念そうに見える人が多い。次のバスはいったい、いつになつたら来るのだろうか。或いは来ないことだつてあるかもしねり。

多くの人を積み残して、田町行きのバスは渋谷を出発した。しかし、渋谷駅が見えなくなるまでに、何分もかかることになる。この先はもっと渋滞していることが予想される。いつたい何時間かかるのか。そしてこのバスに乗り込んだ人たちとは、いつたいどれだけの忍耐力をもつてこのバスに乗り込んだのか。多くの人の憂鬱を乗せ

て、バスは渋谷駅を後にした。

第16話 恵比寿駅前

バスが走り出し、携帯のバッテリーを確認する。残り少ない。こんなときには限つて予備のバッテリーを持つていなければ、ノートパソコンもバッテリーが上がつてしまつていて。こういう状況で情報が途絶えることは一番怖い。どうせ誰かから電話がかかってくることなどないだろう。なるべく携帯の電池を使わないようにしようと思う。それでも、やはり、周りの様子が気になる。バスの窓から見える景色は代わり映えしない。夕闇の中、長い車の列はテールランプの赤い光が怒っているように見える。バスのエンジン音で外の音は聞こえないが、それでも時々大きなクラクションの音が聞こえてくる。

東京の街はイラついている。

経堂駅から渋谷駅に向かうときに使つたバスの車内は、ほとんど会話がなかつた。みんな情報が少なく、それを口にすることにまだ遠慮があつた。「驚いた」「不安だ」「心配だ」「連絡がつかない」およそそのことくらいしか話すことが見つからなかつた。しかし、渋谷を出発した田町行きのバスの中は少し違つていた。断片的だった情報は、自分が独自に得たものと他人から得聞いたもの、そして運よく誰かと連絡が取れた人は、そこからもたらされた情報を互いに交換し合うことで、この震災の細かいディティールが徐々にはつきりと見えてきていた。しかも渋谷駅の混乱を目の当たりにしたことで、情報との温度差を自分中、あるいは行動を共にする他の人とすり合わせて、より具体的なイメージとしての震災を捕らえている。

人はそこから、どう行動するのか？

自らのおかれ立場と、はるか数百キロ先で起きている大惨事。

想像を超える自然の驚異と想定を超える被害の拡大。家族がいる者は家族の安否、家のあるいは被害の算段、独り身の者は、自己の安否を誰に知らせるべきか、どうやって知らせることができるかを模索する。

「誰もがみんな 非日常な中で リアルな現実を抱えている。

「ぜんぜん進まないね」

「さっきから100メートルも進んでないんじゃない」

「どうしよう。これじゃ一つになるかわからないね」

○「風の3人組が私のすぐそばで話をしている。

「そうとう被害が広がってるみたいよ」

「津波で町そのものがなくなっちゃつたって…」

「日本列島が津波警報で真っ赤だよ」

ワンセグでテレビを見ながら若いサラリーマンが話をしている。そうだ、そういう話が聞きたい。こつちはできるだけ携帯の電池を節約したいんだ。もっと情報を 具体的な情報を

「あれ、地下鉄動き出したみたいよ」

「うそ！私のほうにはまだ、見通しが立たないって……」

「どの情報が正しいのかぜんぜんわかんないね」

「デマとかも、かなり流れてるらしいわよ」

「へえ、そうなの？でも、どうやって見分けるのよ」

「千葉のほうの工場の火災、有毒ガスが出てるとかいう情報が流れただけど、デマだって言つてる」

「えー、でも、工場とかヤバくない？ 有毒ガスとか普通に出そうだけど」

「だよねー

女子大生だろうか？ さつきの〇一とは明らかに違う話し方だ。いや、ちがうな。誰と話をしているかで、話の表面が変わるだけだ。あの〇一は仕事上の付き合いであつて、それほどプライベートでの付き合いがあるわけではないのだろう。

私たちが乗る路線バスは、地上を移動する手段としてまるで役に立たないかのように歩行者や自転車に次々と抜かされていった。それでもどうにか最初の停留所につく。しかし、バスは止まらない。この状況でバスを降りる人もいなければ、新たに人を乗せるスペースもない。並木橋、渋谷車庫前を通過する。バス停にも待っている人はいない。東二丁目、東三丁目を通過し、恵比寿駅前とアナウンスがあつたとき、不意にブザーが鳴る。

「だれだよ。空氣読めよ」

〇一のグループから声が上がる。

「こんなところで降りるとか、意味ねーじゃん。最初から乗るなよ
女子大生のグループもはき捨てる。

いや？これは英断だろう。こんな調子でバスに乗つていたら、かえつてストレスになる。できるくらいなら私も降りたいくらいだ。あの老人がいなければ……私は老人の姿を探したが、体を思うような方向にむけることができずにいた。渋谷からなら山手線で一駅、5分もあればいける場所に、なにが悲しくて1時間もかけてバスで行かなければならぬ。まったく馬鹿げている。いつまでこんなことを続けるのか？

私は携帯を取り出し、twitterで情報を確認する。恵比寿で降りて、日比谷線が動いていれば、別ルートで帰れないだろうか

? しかし、すぐにその提案は却下された。渋谷に戻る以外で、ほかに方法はない。あの人だかりの駅から地下鉄が動いたとして、自分だけならまだしも老人を連れまわすことは不可能だろう。

「あ、わたし、ここでおりるね。なんか彼氏からメールが来て、車で迎えに来てくれるって言うから」

「あ、そうなんだ。よかつたねー」

なんとも乾いた会話である。O-Lの一人は、恵比寿で降りて彼氏の車が迎えに来るのを待つというのだ。そんなことだから 道路が渋滞する。そう思ったのは、きっと私だけではないだろう。そう思う自分、そうわかってしまう自分がとても小賢しくてイヤだと思った。

賢くて 何が悪い。

それにしても道路はまったく機能していない。警察はいつたいなにをしているのか? 交通整理ができるとは思えないし、そうえいば、ここまでパトカーの音や緊急車両の音も聞いていないし、だいたい、警官を見ていない。警察も動けないでいるのか、あるいはもっと別の場所に人員をさかなければならなくらい、切羽詰つた状況なのか? 窓の外の景色はずつと止まつたままだ。私には二つの悪い考えが浮かんでいたが、あえてそれ以上考えないようにしていた。

一つはある事実。

もう一つはある妄想である。

第17話 一つの事実

「ねえ、さつきから全然動いてなくない?」「
「そうだよね。10分やそこらじやないよね」

20分だ。いや、もう少し前かもしれない。バスは、まったく動いていない。だが、あえて私はその事実を無視していた。前の座席のほうも少し騒がしくなっている。断片的にしか聞こえてこないが、どうやらこの先の交差点で問題が起きているようだが、ここからでは状況がよくわからない。

身体を少し動かしてみる。視界を確保することは出来なかつたが、前方の様子を覗き見ることはどうにかできた。正面に歩道橋が見える。どうやらそこは明治通りと駒沢通りの交わる交差点のようだ。どういう理由で右折できないのか。この位置から見ることはできないうが『何があきているのか』は、およそ想像はつく。信号が変わつても交差点に車が取り残され、乗用車ならまだしもバスのような大きな車両では曲がりきれないのだろう。誰かが交差点に立つて交通整理をしなければ、このまま前には進むことはできない。

そう、右折車線に入つてから1メートルも進んでいない。いよいよ、バスの中は殺伐としてきた。

「なにやつてんの、このバスの運転手。全然進んでないよ」「だめだよ、あれじや、一生曲がれない」「誰がなんとかしろよ」

最初は囁くような小さな声だったが、次第に『誰にも聞こえないように』というよりも『聞こえまいと遠慮をしている事がわかる程度』にかわり、やがて、周りの人間に聞こえる声の大きさへと変化し

ていった。そしてついに、我慢できなくなつた一人の男が大声を上げた。

「運転手さんー！」のままじや、こつまでたつても着きやしないよー。どうにかしてよー。前に行つて、交通整理するか、無理やり突っ込むように言わなきや どうにもならないよー。無線とか携帯で会社に連絡取れないのー！」

言いたいことを言つ。周りの空気が一瞬張り詰める。そして次に何が起きるかを注意深く見守つてゐる。なんという重たい空氣。なんといふ圧迫感。

やや、しばらへして、運転手が応える。

「そんなこと言つても、どうにもできませんよ。どこのにも連絡なんか取れやしないし……」の交差点さえ越えれば、もう少し道路は流れていると思うんですよ。もう少し待ちください」

先ほど声を上げた男がすぐさま反応する。

「じゃあ、このまま待つてるわけ？ 絶対動きやしないんだから、こんなんじやー！ どうにかしてよー。みんな我慢してるんだよ！ 前のバスのところまで行つて、なんとかしてよー。お願ひしますよー！」

運転手も語氣を荒げる。

「そんなことはわかつてますよ。でも、歩いてなんか行けやしませんよ。ちょっと、待つててください。なんとかしまつすからー。」

ワインカーの音……バスが少し左に動く。どうやら車線を変更しきつとうござりしき。それすらも骨の折れる作業である。しかし、このまま待ち続けるよりかははるかにいい。何度か信号が変わるうちにバスはひとつ左の車線 たぶん直進の車線だろつ に移動した。それにより、目の前の交差点で何が起きているのかがバスの乗客にわかるようになった。これでは、大きなバスでなくても気が小

セーデライバーなら右折することはできない。

アワヨクバワレサキニ

そんな言葉が頭に浮かんでくる。多分最初はここまで混乱していなかつたのだろう。何台かが交差点に取り残され、それをよけるよう他の車が流れを作る。その流れに乗らないと自然前に進めなくなる。それは無秩序な混乱ではなく新たなルールの構築である。その流れに乗れないものは取り残され、除外される。非常時というのは、それまでの常識が通じないだけで、秩序が完全に崩壊するわけではない。しかし、それが完全な崩壊へと発展する可能性を誰が否定でいいよ？

郷に入れば郷に従え

非常時には非常時の対応が必要である。ついにバスは交差点で立ち往生しているバスの横につけた。運転手がサイドブ레이キを引き、前方のドアを開ける。とたんに街の騒音がバスの中に流れ込んでくる。緊張しているのはバスの中だけではなかった。この交差点の周辺は無作為な殺氣で満ちていた。

「誰も、降りないでくださいね。外にはでないで」

運転手は語気を多少強めた口調で言いながら運転席を離れると、急いでバスを降りた。運転手の帽子がフロントガラスの向こうに見える。どうやら隣のバスの運転席の横に回り、サイドの窓から、話をしているらしい。怒鳴り声のような声が時々聞こえるが、それは怒鳴らないと音が聞こえないためなのか、それとも腹の中に何か思うところがあるのかはわからない。たぶん、両方だろう。

プシュー！

折りたたみ式のドアはエアで動いている。ドアが閉められたことで、一瞬バスの中は静かになつたようを感じるが、ディーゼルエンジンが静かであるはずがない。運転手は、サイドブレーキを下ろし、アクセルを踏む。バスが前へ進んだ。

「おー」

乗客の中から声が上がる。それは感嘆といつよりかは、トイレで長いこと踏ん張つた後のため息のようだつた。遅れて右折車線にいるバスも動き出す。私を乗せたバスは、交差点に強引に割り込み、道路をふさぐ。その間に右側にいたバスは少しづつ前に進みどうにか右折をする態勢になる。そこにかぶせるように、こちらのバスが突っ込む。信号が変わつても強引に割り込み、ついに開かずの扉をこじ開けた。

「おー」

再び乗客の中から声が漏れる。それは安堵の声。決して運転手に対する敬意を表すものではなかつた。が、私は敬意を払つた。この状況でマニコアルどおりの行動をとることはないのだ。非常時の時には非常時の判断と行動が必要であり、公共性の高い職につくものには、その判断も、行動も鈍りがちだ。運転手は良く判断し、よく行動したと思う。そして運転手が宣言したとおり、交差点をすぎてからは、少しずつでも前に進むよつになつた。やがてバスは恵比寿の駅のロータリーに入つていった。

「いんなところで降りてどうするんだ」

「乗せることないだろ？ いっぱいなんだから」

口に出して言つ者、目で訴える者、目も耳もふさぎ、無関心を装う者、無関心の者。身動きが取れない分、頭の中を動かすことしかやることがない。感覚も無駄に研ぎ澄まされ、見なくともいいもの、聴かなくてもいいものが聞こえてくる。こんなときは音楽でも聴い

ていたほうが気がまぎれるが、携帯電話の電池の残量が気になつてそれもできない。

ともかく、いい。

この息苦しい状況から一人でも一人でも人が降りつというのなら、それは歓迎すべきことだろう。そしておそらく、恵比寿で人を乗せることはないだろう。しかし、そうはならなかつた。降りた人数は思いのほか多く。その分何人か乗せないわけには行かなかつた。絶望的な状況ではないが、希望を一欠けらずつ、碎いていくような作業である。人がどこまで冷静沈着でりえるか、追い込まれていく状況の中で、誰かに手を差し伸べることを忘れられずにいられるか。そんなことを試すためのアトラクションの乗り物に、がつちりとシートベルトと安全バーで押さえつけられているような、そんなスリーリングで非生産的な気分になつていた。

面白いじゃないか。どこまでいけるか試そうといふのか？

私はバスの中で、覚悟を決めた。定員オーバーのジェットコースターは、恵比寿駅を出発した。恵比寿駅の停留所が見えなくなるまでに、それから30分を要した。私は考えずにいられなかつた。

もう一つの妄想を……

時間の経過とともに、バスは確実に目的地に近づいている。しかし、そのことで得られる安心よりも、疲労や不安、或いは理不尽な状況に対する不満によって削られる『乗客の忍耐』の量の方が少しばかり多かった。それはほんのわずかな差分だが、蓄積は累積となり、累積は自らの認識と行動との間に少しづつ差異を生んでゆく。

雰囲気に流されではダメだ　　と、わかっているつもりでも気持ちは真逆の方向を向き、疲労した身体が人の心を低い方向へといざなう。それに抗う術を本来、誰もが持っているはずである。しかし、問題はその認識があるかどうか。自分が「危険な立場に追いやられている」と気づくかどうかだ。

私が考えたくなかった一つの妄想　　それは、危機に遭遇した集団が、互いに協力し合うという精神状態から、自分、或いは自分に近い人を守るために、いがみ合い、反発し、一つの過失が怨恨を生み、それが疑心となり、嫌悪となり、過去からのマイナスに鎖をつけて、大きな狂氣へと進んでゆくことである。

もし、いま、小さな「じ」が起きるとする。それが二人のグループと3人のグループで、その中の一人がどうにも言葉が汚いヤツだとする。その男が吐き捨てた何気ない　　そう、その男にとつては、日常茶飯事、どうということのない一言だが「アホ」という言葉に周りにいる人間が反応をする。「馬鹿馬鹿しい」ならよかつたのだが「アホらしい」と言つたが為の、些細な感情のブレである。その非友好的な視線に敏感な一人、それはどちらのグループでもいいのだが、その雰囲気にのまれて過剰な反応をする。見かねた誰かがそれを察して中を取り持とうとするも、実はその男が、実は数刻

前に小さな小言を言つていたことを誰かが覚えていて、そのことを指摘する。

彼はプライドの高い男だ。

それぞれが、ぎりぎりの忍耐でこらえているが、きつかけさえあれば、いつでも爆発しそうな状況が出来上がる。

「やめてよ！ お願い！ バスを止めて！ 早く！」から出して！
私、家に帰りたいの！ ただ、それだけなのに、どうしてこんな目にあわないといけないの！」

一人の女がヒスを起こす。彼女は悪くない。なぜならそれは、病気なのだから。しかし、その一言が引き金になり、少しでも心中の摩擦を減らそうと、何人かが大声を出す。

「ふざけるな！ 我慢しているのはお前らだけじゃないんだぞ！
大声をだすんじゃね！」

「そんな言い方をしなくてもいいでしょ！ 彼女 怯えてるじゃない！」

「つむせえな！ ぎゃんぎゃん、ぎゃんぎゃん、騒ぐんじゃないよ
！ 殺されたいのか！」

あまりのドスの利いた声に、思わず誰かがたじろぎ、体がよろけ、隣の女の足を踏みつけてしまう。

「い、痛い。やめてよもう！」

「何しやがるんだ！」

連れの男が、その男の胸倉を掴む。しかし思つよつに動けない。男は自分が動けるだけのスペースを確保しようと、強引に周りを押しのけようとする。

「いい加減しにしろ！ もめじなら外でやつてくれ！」

あちゅうじゅうじゅうで小競り合いがはじまる。

「お客様、どうか落ち着いてください。車内で乱暴はやめてください」

運転手がマイクで呼びかけるが、まったく効果がない。車内が混沌とし始める。私は老人の姿を探す。おかしい、前の席にいるはずなのに……

「すいません、ちょっと、前に行かせてもらつていいですか?」

私は老人が見える位置まで移動しようとするが、思うように前に進めない。それどころか、激しい敵対心を周りから向けられる。

「面倒は困る。おとなしくしてしてくれ」

一人の男が私を睨みながら、低く唸る。

「違うんだ。連れがいる。前の席に座っているはずなんだが、姿が

……

「いいから、お前はそこから動くな。動けばただじゃ置かないぞ」

「な、なんだと、貴様、何様のつもり」

「あんた、いい加減になさいよ。こんな状況で前になんか行けるわけないでしょ!」

近くにいたO君が、まるでセクハラをしたさえない男を見下げるような目で、私を見る。

「どうして私が、そんな口の聞き方をされないといけないのかね。だいたい、お前たちのような

」

私はその後何を言おうとしていたのか、わからない。思い出せない。たぶん、卑劣なことを言つたのだと思う。しかし、次の瞬間、私の妄想は、現実の枠を飛び越えて、自走式の狂気へと向かつていった。

「ドドドーっ!」

突然、突風が吹き荒れ、バスが大きく揺れる。突風?　いや、ち

がう。それはまるで砂煙のよな細かい粒子の粒がある砂嵐のようだつた。しかし、砂であれば、窓ガラスに小石が当たるような音がしそうなものであるが、そういう音は聞こえてこない。まるで細かい灰を被つたような、そんな感じだつた。

「な、なんだ？ 何が起きている？」

「おい、大丈夫かよ、これ」

「おい、おい、なんかやばくないか」

「外が全然見えなくなつたぞ。おい、誰か！ なにか見えるヤツいるか！」

「だめだ、何か細かい粉みたいなのが窓ガラスにくつ付いていて何も見えない」

「粉？ どつかの馬鹿がセメントでも撒き散らしたか」

「なあ、これつて９・１・１みたいじゃないか。あの貿易センタービルが倒壊したときの粉塵」

「おい、つて、『ひとは』の近くで同じような事がおきたつていうのか？」

「まさか？ そんなこと……」

「おい、誰かネットつながるやついないか？ これだけの事が起きてたら、何か情報出しているだろう？」

「ワイパーを」

そう誰かが行つたときは、バスの運転手はワイパーを動かしていたが、全くといつていよいほど無力だった。ワイパーが動くたびに灰色の粉がフロントガラスにまとわりつく、何本もの筋ができるが、そこから覗けるのは、わずか数センチ先の煙上に舞い上がつた粉塵である。

「窓は絶対に開けないでください」

運転手は、落ち着いた声でマイクを使って車内に案内し、エンジンを切つた。この粉塵のようなものを吸い込んでは、動くものも動

かなくなる。そう判断したのだろう。車内が静かになつた。何が起きているのかを知ろうとして、みんな耳を済ませる。恐ろしいほど音がない。仮にかなり広範囲にこの粉塵のよつなものが巻き散らかされているとして、もしそうだとするのなら、周りの音はかなり聞きづらくなるだろ。しかし、クラクションの音一つもしないというのは、どうだろか？

「クラクションを鳴らしてみては？」

運転手のそばにいる男が提案をした。「こちらからは様子がわからぬ。若い男の声のようだが

プップー——ツ。プ——。

やはり音の返りが極端に悪い。クラクションはいつもの音の半分にも満たない大きさで、寂しく暗闇に吸い込まれていく。なんとも不気味な感じである。まるで目の前で空間が歪み、そこに音が吸い込まれてしまつていてるよつだ。周りを注意深く目を凝らしてみると、何の変化もない。なんの反応もない。

「いつたいどうなつてるんだ？」

「なによこれ、私たちどうなつちやうの」

「落ち着けよ。下手に動かないほうがいい」

「だつて、これ、絶対に変よ。教えて！ 外では一体何が起きてるの？」

「おい、ネットで情報つかめた人、誰かいるか？」

「ダメだ、全然繋がらない。さつきまで電波来てたのに、圏外になつてる」

「こつちもだ。もしかして、全部のキャリア、ダメなのか」

私は、自分の携帯を確認してみた。不思議なことに自分の携帯は

電波が三本立っている。しかし、私は考えた。もし、自分の携帯が使えるのであれば、他の誰かも使えるはずだ。ただでさえ、電池が少なくなっている。他に使えるやつがあるはずだと。しかし、誰一人、自分の端末が繋がると申し出るものはいなかつた。いつたい、なにが起きている。これは、どうしたことなんだ。

私は携帯を胸のポケットにしまい、しばらく事態の推移を見守ることにした。

「どうです？ 繋がりませんか」

田の前に席に座っている学生風の女性は同じ私とキャリアの携帯を持つていた。

「ダメです。圏外です」

「そうですか……おかしいですね」

私は一瞬、余計なことを言つたと思った。が、その心配はなかつた。

「そうですよね。みんな繋がらないなんて……」

危ない。私は思わず胸をなでおろした。今は、考える。ともかく考える。軽率な行動は命取りだ。こんなところで死ぬわけには行かない。自分だけでも

いや、それは行かない。あの老人のことをすっかり忘れていた。あの老人を置き去りにするなどできない。このバスの乗客を全員見捨てても、あの老人だけは助けなければならぬ。

私は 私は

自分がなぜ、今までしてあの老人に拘るのか。まったくわからなかつた。しかし、そうしなければならないという強迫観念にも似た強い思いが私を突き動かしていた。私は、再び、老人を探し始めた。

第19話 全部嘘だつた

エレベーター そう、知り合いが一人もいない状況で、客先の大
きなビルのエレベーターに乗ったときのような嫌な沈黙が続く。しか
し、誰もボタンを押していない。押すことができない。だから外か
ら誰かがボタンを押さなければ、永遠にこの状況は終わらないのだ。
息苦しさと、荒唐無稽さと、そしてもう一つ。恐怖或いは狂氣と隣
り合わせの感覚。面白い事が起きればみな笑い始めるだろうし、恐
ろしい事が起きれば、全員がパニック状態に陥る。そんな『危険な
状態』に私たちは置かれていた。

私はといえば、違う意味でパニックを起こしそうになっていた。
老人の姿がどこにも見当たらないのである。

「す、すいません。ちょっと、いいですか？ その席のあたりに、
連れのおじいさんが お年寄りがいるはずなんですが……」

私は、思い切って でも、小さな声 なるべく多くの人間に
聞かないように、O-Lのグループに声をかけた。間違いなくその
向こう側に老人がいるはずだと、私は確信していたし、そのあたり
は完全にこちら側から死角になっていたので、記憶においても消去
法を使つた論理的推測においても、まったく疑いようがなかつた。

「おじいさん、ですか？ 鈴木さん、わかる？」

「えつ、ちょっと待つて……このあたりには『おじいさん』って感
じの方はいないようですけど」

「反対側は？ 田中さん、わかる？」

「ううん。こっちもそういう人は……お名前とかわかります？」

「あ、ああ、そうですか、いや、実はバスに乗り込むときに知り合
つただけで、名前とかは……おかしいな。たしか、渋谷から乗つた

時は、そのあたりに座つたものだと

「前のほうに移動されたとか？優先席のほうまでは、ちょっとそこから見えませんから、声をかけてみましょうか？」

「いえ、いいんです。お気遣いなく。多分、私の勘違いでしょから。すいません。ありがとうございました」

Oしたちは不思議そうな目で私をみやるも、すぐに関心ことはバスの外の様子に向けられた。私の行動は、私の期待通り、何事もなかつたように誰の心にも留まらない些細なこととなつた。しかし、本当に得たい結果は、まるで今の状況を象徴するかのように、暗中の只中でそれを得る手立てを何も思いつかなかつた。

「お、おい。大丈夫か？鼻から血が出ているぞ」

「え、うそ、やだ……のぼせたのかな……すごく気分が悪い」

バスの後部座席の先頭、ちょうどビスティップを一段上がつたところの一人掛けのシートに座る若い男女の二人組み　たぶんカップルと思えるのだが、窓側に座る女性の体調に異変が起きた。

「おい、大丈夫か？おい？」

女性の具合はどんどん悪くなつてゐるようだ。鼻血がとまらない。目がうつろで、頬は火傷をしたかのように真つ赤にはれ上がりきっている。尋常じゃない。男が彼女の鼻をハンカチで押さえ、血を止めようとすると、血が止まらない。彼には見えていない。なぜ血が止まらないのか、彼には見えていない。

「なんだ？どうしたんだ。血が止まらない……助けて、誰か、誰か

……

男が他の乗客を見回す。必死の思いで助けを求める。しかし、誰一人応えようとしない。いや、応えられないのだ。あまりも凄惨な光景　そう、血は彼女のものだけではなく、彼の鼻からもおびただしい血が流れていたのだ。

キヤーッ！

一人の席の回りから悲鳴が上がる。鼻から血を流した男はよつやく自分の身体に起きている異常に気がつくも、意識は既に朦朧として目の焦点があつていいない。

「病氣か」

「まさか、伝染病とか、そんなことが……」

「こ、これはテロなのか？ 細菌兵器とかじゃないのか？」

「おい、早くここれから出してくれー！」

「運転手さん」

あちこちで怒号と悲鳴が聞こえる。

「おい、だめだ、運転手さんが……」

「どうしたの？」

「運転手も目や鼻から血を流して……い、意識がない」

「なんなの、なんのなによこれ、どうやつたらドアが開くのよ！」
「落ち着け、もしかしたら外のあのが、やばいかもしないじゃないか。窓を開けるなよ」

「そんなこと言つたつて、いつまでもここにいたら……みんなみんな死んじゃうじゃない！」

私は、注意深く様子を伺つていた。窓側にいる人間はみな、気分が悪そうだ。同じような症状が出ている。これは、やはり、外の粉塵が影響しているとしか思えない。しかし、それほど多く車内に入っているわけでもないようだし、直接鼻から吸い込んだのが原因だとしたら、何人かはそれに気づくはずである。ただの粉塵ではないことはわかるが、細菌兵器とか、そんなものは、映画やテレビの世界の話だ。ここは現実だ。もっとリアルで、絶望的な状況を、私は

想像できる。

私は携帯を手に取り、タイムラインを確認した。繋がる。が、動きはない。ある時間で止まっている。ほんの5分前だ。

非常事態

原子力発電所

メルトダウン

制御不能

核融合

死の灰

「放射能汚染……そんな……まさか、ありえない。福島からの距離は……」

あまりにも目を疑うような単語の羅列に、私は思わず声に出していつてしまった。

「ど、どうしたんですか？ 放射能って…… あ、あなた、その携帯使えるじゃないですか！」

うかつだった。最後部の座席に座るサフワーマン風の若い男が、私の携帯を覗き込んでいた。

「あなた、どうしてそれを黙っていたんです。これって、原発が事故で放射能が東京中にばら撒かれたってことですよね。あなたそれを知っていて、ずっと黙っていたんですか？」

「ちがう、ちがいますよ。これは、私も今見たんです。私だって、

知つていれば……

「知つていたから、おじいさんがどうのとか、言つて、あわよくば自分だけバスから降りて、安全な場所に逃げようと思つたんですね」

「そんな、私は、ただ、私は、あの老人、あの老人を、送ろうと、心配して、本当だ。信じてくれ」

私は必死で言い訳をした。いや、言い訳じゃない。本当のことだ。本当のことのはずなのに、どうして、あの老人は、自分の前から姿を消したのだ。

「信じてくれだと……」この状況で、誰を、何を信じとこうんだ」「待て、ちょっと待つてくれ、話せばわかる。そんなはずはないんだ。放射能だなんて、そんなはずはない」

私は信じられないほど冷静だった。どんなに激しい爆発があつたとしても、高々数分で、死の灰がこんなところまで、しかも視界をさえぎるほど降り積もるなどありえない。ありえないのだ。

「じゃあ、なぜ隠していたの？　あなた、自分で携帯が使えることを隠してたんでしょう！」

「ちがう！だから、それは……」

「ちがうだ？　おじさん、何調子ぶつこいでいるのー。さけんじやないわよー！」

「なんだと、なんでお前らなんかに、そんな口の利かれ方をしなきゃならないんだ！」

「ほら、本音が出たよ。どうせ、私たちなんか、死んだほうがましだって思つていたんでしょ？」「ちがう、ちがうんだ。そりぢゃない」

いや、全部嘘だ。本当はそう思つていた。

私は 誰も 信じてはいな

死んでしまえば いいと思っている奴がいる

いなくなればいいと 思つて いる奴がいる

私は 私のまわりの ごく一部の人だけ 助かればいいと思って
いる

私は そう これが 人間だ

でも でも 私は

あの 老人だけは あの 老人だけは…… 守らなくては！

第20話 胡蝶の夢

私は必死で探した。私の半径1メートル以内に8人以上いる。みんなで私を取り囮み、罵声を浴びせる。最初の何人かの言葉は理解したが、数があまりにも多すぎて私の耳からあふれ出てしまつていて。聞こえすぎて、何も聞こえない。それでも私は探した。探すことを止めなかつた。

あの老人はいつたいどこに……どこにいる？　いや、どこに行つてしまつた？

「ちょっと、あんた人の話し聞いているの！　そんなことだから」

「お前みたいなヤツがいるから、世の中おかしくなるんだ」「自分だけ助かるうなんて」

知らない。わからない。私じゃない。それは私じゃない。私は私だ。でも、今こうして狂ったバスの中で罵声を浴びせかけられるのは、私じゃない。

私じゃない。

必死に思つこともなれば、悲壯になることもない。それよりも何よりも　老人を探さなければ！

私を激しく問い合わせ、非難するO-L風の女性　髪の毛を後ろで結わき、化粧も服装もおとなしめなのに爪だけは、なにか変な模様がついている。ネイルアートとかいうやつか。付け爪というのは、着脱可能なのか　その背後にちらりとそれは見えたように見えた。

彼女の結わいた髪の毛が揺れて見えた隙間に老人が見えたよつた気がした。

「おい、そこをどいてくれ。私は老人を
「な、なにをするの！ 亂暴はやめて！」
「こ、こいつ、逃げる気か！ 一人で」
「違う、違うんだ！ 聞いてくれ！ 本当に私には連れが　老人
が、老人を送らないと。老人の望むところまで　」
「いい加減なことを言つな！ 貴様はそんなこと　これっぽっちも
思つちやいない」

「そうよ。老人のことなんか考えていない
「いなくなればいいと思つてている」

「面倒だと思つている」

「あの場で自転車を盗めばよかつたと思つていて」

「そうすればこんな目にあわなかつたと　そう思つてている」

私の耳に届いていない罵声は、やがて私の心の中に違う形で進入
してきた。流れ込んできた。文字と色と映像と音と温度、それに
痛みと 苦しみと 不安と 恐怖と

私は一瞬挫けそうになつて、心が折れそうになつて、それでも
いや、だからこそ私は前に進むことを止めなかつた。止めるこ
とが出来なかつた。止めるわけにはいかなかつた。なぜなら

なぜなら私は　そうしなければ　ならないから

もはや論理的な理由など必要なかつた。いや、この世界はすでに
論理は通用しない。そういう時は、そうでないもので戦うしかない
のだ。抗うしかないのだ。退いてしまつては、下がつてしまつては
……覚悟は出来ていた。あとは実行するだけだ。なにを迷うことか

ある。何を省みることがある。何を恐れることがある。私は……私は……

やるべきことをやるだけなのだ。なすべきことをなすだけなのだ。
それが誤りだといつのなら、……」んな世界は、いらない。

私は「じぶしを振り上げ、自分の思いを「じぶしに乗せて迷うことなく一撃を行く手を阻もうとする者に「ぶつけた。その手」たえは気持ちが悪いほどすかすかだった。確かな反発は感じながらも、どことなくあやふやで薄いものだった。

「「」、これは……」

最初に私の「じぶしを左のほうに受けた男は、まるで砂の城のようにもろく崩れ去る。左のひじを「」に当てられた女も砕け散る。
「この現実感のなさはいったい……このいい加減さは、このでたらめさはいったい！」

それでもまだ、私の行く手を阻もうとする者には立ち向かわなければならなかつた。そうしなければ、最初のところへ押し戻されてしまう。いつまでたつても老人がいるところ、いや、居ると思われるところにはたどり着けない。そうわかつた。わかつてしまつた。

私は覚悟を決めなおさなければならなかつた。

「何がなんでも、そして、これが夢であるうが幻であるうが、私は私はあの老人を」

夢とはなんじや　幻とはなんじや

すべての音が消え、すべての色が消え、すべての匂いが消えた。
そして問いかける声だけがはつきりと、そこにはあった。

「幻とは夢の中であるものの。夢は……現実とは違う」

夢は現実の中で見るものじゃ 違うか？

「現実に居るから夢を見る。夢を見ているときは、現実はどうなつているかは、知らな」

夢を見ているとき、現実は夢の中にある 違うか？

「現実？ 私はいつも現実の中で生きている。私が居るところが現実だ」

夢と現実はちがうところのか では、ひとつ聞く 現実とはなんじや？

「現実とは」

何かを言おうとした私の口は、田の前に現れた一匹の蝶々によつてふさがれてしまった。それは青もあるし、紫もあつた。また、赤でもありえた。大きくもあり、小さくもある。遠くのよつで近く、近くのよつで遠い。

現実のよつで夢でもあり、夢のよつで現実でもある 違うか？

「蝶を見ている私はいる。そして私を見ている蝶もいる」

なぜ、蝶とわかる？ なぜ、自分とわかる？

「蝶は蝶で私ではない。 私は私で」

蝶でないと切りれるか？

「わからない」

「わからない」とわかることは難しい 難い違つか?

「難しい」

ならば他人もひどい わからぬことをわかることは難しい

人はわかるようにしか わからん そういうものだ

「……」

沈黙はときには言葉よりも多くを語る 語られた言葉には色がつく

「……」

「すいません。降ります。通してください」

彼氏が迎えに来るというのー風の女性の声だ。私は静かに現実に舞い戻った。

「恵比寿駅前です。ドアを開けますので、ドアのそばから離れてください」

バスの運転手は、静かに、そして丁寧にマイクで指示を出した。しかしその声には明らかに疲労とストレスがにじみ出ていた。

「じゃや、気をつけてね」

「うん、お先に」

短い挨拶の中に複雑な思いが見え隠れする。そう感じる人もいれば、何も思わない人もいるだろう。老人はそこに、そう、それまでずっとそこについたかのように、私がいると思ったその場所、そのシ

ートに腰をかけていた。どこからが現実で、どこからが夢なのか、そんなことはどうでもいい。老人は私のほうを振り向き、無表情に微笑みかけた。老人の顔のシワは、普通にしていても笑っているよう見える。しかし、光の加減、影のつき方によつては、恐ろしく冷たい表情にも見える。

私はそんな老人をみつめて、ほつと胸をなでおろしたい気分になつた。

現実でも幻でもいい。あの老人がいるのならば、それでいい。

バスは3人ほど人が降り、同じ分だけ人を乗せたようだつた。いずれにしても……時間の流れが滅茶苦茶だ。しかし、今こうして考えている自分がいるのだから、ここが現実だとと思うより他に手はない。いつだってそうじゃないか。何事もなかつたかのようにバスは走り出す。さつき感じた息苦しさは、いささか和らいでいるような気がする。老人を見て安心したのか、私は急に世の中の事が不安になつた。この震災の被害はいつたいどれほどものなのだろうか？

しかし、どんなに思いあぐねても、震災の現実がわかるまでには至らない。このとき私が知つてゐる現実とは、それほど小さく、細く、浅く、狭く、そして古いものだつた。想像を超える現実が実在すると知るには、まだ、時間が必要だつた。

第21話 幻想からの回帰

「ハーツ」とは、はじめてではない。

私は以前にも同じような経験をしたことがある。この場合の『同じよう』とは震災を指すのではなく、蝴蝶の夢、妄想か幻想か、ともかく現実と区別のつかないような、不思議な感覚のことである。

私は、すっかり憔悴しきっていた。ここまでの長い道のり、いや、距離よりも時間である。そして空間である。路線バスという限定された空間で、時間と距離を移動する。外の景色は変わっていくが、私の目の前には先ほど以来、ずっと変わらない景色が続いている。そしてきっとそれは私だけに限ったことではない。ここにいる全ての人人が同じような境遇にある。

にもかかわらず、人は完全には、協調し得ない。

しかしそれは幸いなことなのかもしれない。先ほどの幻想は、ひとつパラレルワールドのようなものだ。もしも協調性が強く働けば、そしてそれが、不安や疑心暗鬼の方向に進めば、人はそこで争わずにはいられないだろう。なぜならそれは重大な身の危険に繋がるからだ。

重大な身の危険。

それは果たして、どんなものなのか？ あれだけの地震だ。エレベータに閉じ込められたり、高層ビルに閉じ込められた人はたくさんいるだろう。或いは火災によって、煙に巻き込まれた人もいるかもしれない。それよりも何よりも震源地、そして津波の被害にあつ

た地域は、それ以上のことになつてゐるに違ひない。

しかし、それを想像することは不可能だった。

阪神淡路の時だつて、実感は何もなかつた。スマトラはそれこそ対岸の火事だ。まるでハリウッド映画を觀てゐるような無責任な感覚は本当に気持ちが悪い。そしてそんな時、決まつて私の中である異変が起きる。あの津波の映像をみたとき、そして住民の恐怖体験をニュースで聞いたとき、私は夢を見た。それは大きな地震によつて引き起こされた津波によつて、家族がバラバラになつてしまつという夢だ。私は妻の手を握り、娘の手を握る。そして息子は……息子の手を握ることはできない。私の両腕はふさがつてゐるのだからいないので私はわかる。

声を張り上げて息子の名前を呼ぶ。叫ぶ。瓦礫をかき分け、まだ膝ほどある水面の中に手をいれて手当たり次第に引っ張り上げる。しかし、息子を見つけることができなければ、妻や娘の姿さえ、見失つてしまつ。「死」という言葉が脳裏に浮かぶのを必死でこらえ、探し回る。そして私はついに妻を見つけ、娘を見つける。どうにか見つけることができた命。しかし、息子は見つからない。その場所を捜していくも見つかるわけがないとわかる。その場所には息子はないのだと私はわかる。

生のある場所にもう、息子はいない。

そして、私は　私たちちは死のある場所で息子を捜す決心をする。覺悟をする。死と向き合つ。

夢から覚めても涙が止まることはなかつた。それは安堵からなのか、死の余韻からなのかはわからない。夢でよかつたと思う。しかし、夢ではない現実はあるのだ。きっと、そういうことがあるのだ。

あるとわかつていても、私は、私たちはそれを想像することはできない。備えることはできない。重大な身の危険は、深刻さが増せば増すほど、現実味が薄れてしまうのだ。しかし

私は蝶になつた夢を見ている私なのか 私になつた夢を見ている蝶なのか？

「その答えは、どこにも ありはせんよ」

老人は静かに言った。言つたように聞こえた。薄れていく現実感。夢の中のことだと思っていた事が現実になる。現実に起きている。いま、このとき、この瞬間、あの夢の中の悲しみが、北の地に溢れているんだ。夢と現実の境い目は、巨大な地震と津波によって崩れ去り、押し返される。ありえないと思っていた事が、今こうして起きている同じ時間軸の中に、私は このバスは、居るんだ。

答えはどこにもない？ ジャア、どこに行けば、どこに行けばその答えに……

『死』と言う文字が私の脳裏に浮かぶ、いや、もっと違うところがイメージの世界ではない、より現実に近い世界に『死』がある。数千という数の『死』が、夢の世界から現実の世界に溢れてきている。ここが このバスの中が安全である保障はどこにもない。そして いまだ連絡の取れない家族も、今までの感覚で考えていいられないのかもしけない。

家族と 連絡を 取らなければ

「大丈夫、心配はない……」

それは私の口からこぼれた言葉、だけど、本当にそれは私の言葉だつたのか、私には知る術はなかつた。

「直接がダメなら……誰かの手を借りればいい。そうか、あいつな

ら連絡がつくか

それは私の言葉だった。しかし、過去の私ではない。私の中で何かがわかった。スイッチが切り替わる。今やるべきこと、できることをやらなければ、そうしなければ……

私は携帯の電源をいれ、twitterの画面を立ち上げた。そしてすぐに目的のものを探し出した。

「あつた。これで連絡が取れる！」

それは近所に住む、かつての同じ会社に勤めていた三崎という男のアカウントだった。

『かなりヤバイことになっているようだけど、とりあえず何人かの無事を確認。携帯通じないとき、ツイッターフて、便利だな』

そのつぶやきに返信をする。

『おつかれー そつちは大丈夫か？ お願ひがあるんだが、うちの様子を見てきて欲しいんだ。連絡が取れていらない。こつちは品川の実家に向かっていると伝えてくれ』

3分後、返事が返ってきた。

『了解です。様子を見てくるだけでいいんですか？ とりあえず今から行つて来ます』

すぐにお礼のツイート。

『すまない。お礼はいつか、精神的なもので！』

20分後、待ち望んでいた情報がもたらされた。

『拍子抜けするくらい大丈夫でしたよ。本当にキモの座つた奥さんですね。お子さんたちも無駄に元気でした。心配ないようですね』

帰還します

私は心を込めて言葉を送った。

『ありがとう。感謝する』

私はその日、はじめて心に余裕を持てた気がした。そして、考えた。このまま田町まで行くのがいいのか、それとも途中で降りたほう

うがいいのか。何が一番最善の策かといふことを

第3章終わり 第4章に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2404y/>

静かなる老人

2011年11月29日19時53分発行